

インテルメッツォ

YAMANAKA
TOMOTAKA

山中與隆



Duo - Yamanka

インテルメッツォ

山中與隆

目次

インテルメッツォ 1

〔二〕 ジストニア 1

〔三〕 コンサート 57

〔三〕 舞鶴発、小樽行きフェリーで 74

〔四〕 北海道で 115

- 〔五〕 小樽発、舞鶴行きフェリーで 170
- 〔六〕 旅行最終日 206
- 〔七〕 憧れの人と 213
- 〔八〕 八木孝子の正体 236
- 〔九〕 アメリカ滞在 278
- 〔十〕 帰国 290
- 〔十一〕 大竹での生活 295

編者あとがき			
	〔十四〕	帰還	376
	〔十三〕	礼文島	364
	〔十二〕	暗雲	317

インテルメッツォ

作 山中與隆

〔一〕 ジストニア

三瓶弦人、六十才の元バイオリニスト。彼が右腕のジストニアに罹って演奏家を辞めてから五年、ダ

ラダラと続いてきた無為な生活にそろそろ飽きてきた。良く言えば、何かがしたくなってきた。

年齢的には五十五才というのは早すぎる引退だった。三瓶弦人は大きな喪失感に襲われることを覚悟していたが、予想に反して彼の心を満たしたのは大きな開放感だった。それは四才でバイオリンを始め、それからおよそ五十年間のプレッシャーとストレスの生活から突然無重力の世界に放り込まれたような、

生まれて初めて味わう感覚で、敗北感とは違うものであつた。

バイオリニストがバイオリンを弾かなくなつたら何をするのか。弦人は自分に残された可能性を探つた。これからまだしばらくは続くであろう人生を何もせず生きていくことはできない。それは精神的な問題だけではなく、現実生きていくための経済的な問題でもあつた。

しかし、弦人は四才の時からバイオリンを弾くこと以外何も学んでこなかった。もちろん小学校にも中学校にも行つたが、そのときでさえバイオリンが常に最優先とされた。レッスンのためにはいくらでも学校を休んだし、練習が足りないと言われて学校に行かずに練習させられたこともしばしばだった。子供るときからコンクールを渡り歩き、良い成績を上げるとそれはますますエスカレートした。コンク

ール荒らしと言われたこともあった。弦人の両親はそんな陰口を

「負け犬の遠吠え」

と言つて無視した。コンクールを控えた時期には、何日も学校に行かずに練習に没頭した。もちろんそのような生活は、まだ子供だった弦人の選択ではなく、両親の強い願望からくるものだった。弦人は普通の子供たちが遊んでいる時間にバイオリンを弾い

ていた。

弦人の両親は、どちらにも音楽の専門家ではなかつたが、父親はアマチュアのバイオリニストだった。父は若いころプロの演奏家になる夢を持っていたが、家庭の経済的な事情で果たせなかつた。しかし本当の理由は才能にあったことを、父自身知っていた。そのかわり結婚する前から子供はバイオリニストにする決めていて、男の子だったので弦人と名付け

た。弦人は一人っ子だ。

弦人はバイオリンを弾くことに関して、誰にも負けないくらい多くを学んだし、バイオリンを弾くことに必要なあらゆることを身につけた。その結果全盛時代には、

「音楽に捧げられた人生」

「バイオリンと結婚した男」

などと書かれたりもした。何処に行っても、特に日

本では若いときから先生、先生と呼ばれた。自分は選ばれた人間で偉いのだと言う驕りが彼に無かつたとは言えない。しかし、人々の中で弦人は営業スマイルにも似た謙虚な態度を衣として纏っていた。そのためだろうか

「三瓶先生は偉大なバイオリニストなのに、なんと謙虚なのだろう」
などと言われたりもした。

しかしバイオリニストと言う着ぐるみの中の三瓶弦人は、五十年間一度も脱いだことのないその着ぐるみの中の汗と汚れで腐敗したような匂いに満ちた狭い空間で四苦八苦してきたのだった。

バイオリンが上手いのは自分だけでないことを弦人はよく知っていた。次々と現れる新しい才能は常に彼の立場を脅かした。幾つになっても懸命な努力の手を緩めることはできない。野球選手の間にも、

「ホームランは減らないが打率は下がる」という言葉がある。バイオリンの技術はホームランではなく打率のようなものだ。過去の演奏が如何に素晴らしくても、次の演奏が素晴らしくなければたちまち過去の人になってしまう。追い抜こうとして迫ってくる新しい才能との競争であると同時に、自分自身との闘いでもある。それは弦人だけではなく、トップレベルの演奏家たちが繰り広げるあまりにも

激しい世界の常である。そこまでしなくてもバイオリニストであり続けることはできる。そのような生き方に甘んじている者は少なくないが弦人はトップレベルであり続けることを選択したのだった。

そのバイオリニストを辞めて何ができると言うのか。演奏技術だけでなく、バイオリンを弾くこと以外に、精神的に充実感を味わい、喝采を受け、同時

に経済的に糧を得る方法を弦人は知らない。三瓶弦人と言う人間の引き出しは、どれを開けてもバイオリンに関するものでいっぱいになっていて、それ以外のものはまったく入り込む余地がないのだ。しかも辞めてみて初めて気が付いたのだが、広い意味での『音楽』と言うものも、『人間』と言うものも、どの引き出しをひっくり返しても見当たらないのである。弦人はバイオリンを弾くためだけに作られた精

巧なロボットだったのだろうか。にもかかわらず、批評家たちは

「三瓶の演奏は深い人間性と、音楽性から生まれる」などと書き立てていた。弦人は自分に対するこれまでの評判そのものにも疑問を感じるのだった。

弦人は引退に際して、教師として各方面から誘いがあつたが、音楽に関わる人間社会に疑問を感じ出した彼は、それらを一切断つて故郷の広島に引つ込

んだのだった。

バイオリンが弾けなくなつたことを除けば身体も頭も至つて健康である。ハローワークにも行つてみ
たし、新聞の求人欄も隅から隅まで読んだ。当然の
ことながら、バイオリンを見事に弾きこなし、それ
を多くの聴衆に聞いてもらい、喝采を受ける。その
ような生活を五十年近く続けてきた弦人にとって、

それ以上充実した仕事は、ハローワークや新聞の求人欄にあるとは思えなかつた。

弦人は次第に無気力になつていった。引退してから半年も経つたころには、何をする意欲も失つていた。一人暮らしの弦人は、食べることにさえ興味が沸かなくなつていった。買い込んだインスタント食品を、腹が減つてどうしようもなくなくなつたときにだけ食べた。

引退したとき手元にあつた貯金は決して多くは無く、何もしなければ数年もしないうちに食いつぶしてしまふことはわかつていた。それがわかつていても、意欲は沸いてこない。

職業柄音楽のCDはたくさんあつたが、若いころ好きで買い貯めたブラームスの音楽以外は、たいてい自分が演奏するバイオリンの曲がほとんどで、聞くのもそのとき弾くことになつてゐるバイオリンの

曲を参考にするくらいだった。それも、ライバルたちがどのよう演奏しているかを知るためで、彼らの真似にならないようにチェツクするのが目的だった。そして彼らよりも良い音で、彼らよりも魅力的なアイデアで演奏する努力をした。

音楽を楽しんだり、心の糧として聞いたりした記憶は遠い昔にしかないような気がする。

バイオリンを弾かなくなっただけ、そのようなバイオリンのCDを聞く気もしない。テレビも面白いと思う番組は見つからなかった。ぼんやりと野球中継を点けっぱなしにして居眠りする毎日になった。クラシックの音楽番組が始まると消してしまっただけだ。もちろんコンサートには行かないし、コンサート情報もまったく知らずとした。だから地元でどのような人たちが、どのような活動をしてい

るかにも無関心だった。

たまたま街に出てCDショップに立ち寄ったことがあつたが、まったく興味が沸かず、特にバイオリン曲のコーナーに並ぶ名バイオリニストたちの名前を見ると、彼らの血なまぐさい闘いが垣間見えて嫌悪感さえおぼえた。

弦人は、自分がそのような生活が続けてきたため、

友人との接触もなかった。友人たちは、失意の引退をした弦人に遠慮していたのかも知れない。それに弦人の方からの連絡がまったくない以上、声をかけるにもかけようがなかったのだと思う。理由はそれだけではない。幼いときからバイオリンしかなかったような弦人に、心の友と言える存在はほとんど無かったのである。

しかし、五年も音沙汰が無いことを気にかけて、

連絡してくれた友人が一人いた。林健三である。

林は、大学でフランス語を教えていて、弦人とは演奏家時代に知り合った友人だ。林が音楽家でないことが二人の関係を長続きさせていた。音楽家同士は、仕事上の付き合いはあっても友情が育たないと弦人は感じていた。皆がライブルと言うこともあるが、弦人は音楽家たちに友達になりたいと思うような魅力を感じたことがなかった。

仕事を一緒にすることになったピアニストの女性で、容姿も音楽も魅力的な者は少なからずいたが、付き合いたいと思うような女性はいなかった。弦人が人間嫌いというわけでもなかったのだが、彼女らもまた弦人と同じように子供のころから音楽一筋に生きてきた者ばかりである。そのような自分と同類の人間に弦人は興味を持てなかつたのである。そのような人生観を持ってしまったために、弦人は現在

まで独身なのだ。

林健三は、前触れも無く訪ねてきた。二年くらい前、林は何か旨いものでも食いながらゆつくり話をしないかと弦人を誘ったことがあつた。それが弦人のもつとも無気力な時期で、弦人はけんもほろろに林の親切な誘いを断つたのだつた。それにも懲りず、林は弦人を訪ねて来てくれた。今の弦人には嬉しか

った。

林がマンシヨンの五階にある弦人の部屋の呼び鈴を鳴らしたとき、弦人は、しばらく散髪に行つていないぼうぼうの頭に無精髭でのっそりと玄関を開けた。あまり着替えていないようなジャージー姿の弦人に、林はやや驚いた。だが開口一番、

「元氣そうじゃないか」

と言つた。

「ああ、元気だよ」

と弦人は答えた。

実際に弦人は最近家の近くをウォーキングしている。陽に焼けている。林は二年くらい前のことがあったので、弦人の不健康そうな顔色と不機嫌な対応を覚悟していたが、予想と違って笑顔で迎えられたのでホツとした。

弦人は、直ぐに片付けるからと言って林を玄関に

待たせたまま、バタバタと散らばったものを積み重ね、万年床を雑にたたんで押入れに突っ込み、取り入れたまま散らばっていた洗濯物も押入れの布団の上には投げ込んだ。丸く掃除機をかけ、流しに重なっている食器を洗った。二十分以上待たせたかも知れない。途中で、

「散らかってても構わんよ」

と玄関から林の大きな声が聞こえたが、弦人は無視

して片付けを続けた。ようやく一段落して林を迎え入れながら、待たせたことを謝る弦人に、林は「追い返されなかつただけ良かったよ」と言つた。

居間の真ん中には、一人暮らしにしては大きな四人がけのテーブルがあつたが、その半分くらいには新聞や雑誌その他が山積みになっている。居間の奥に部屋が二つあるが、どちらもふすまが閉められて

いる。それらの部屋は掃除が間に合わなかつたのだ。

林がテーブルの空いた側の椅子に座ると、弦人は冷蔵庫から缶コーヒーを二つ出して林と向かい合つた。

「すっかり待たせてしまつて。電話でもしてくれていたらちゃんと掃除しておくのに」とあらためて挨拶した。そして、

「いつかは、折角誘つてくれたのに申し訳なかつた。

なにしろひどく落ち込んでしまっていたもので」

「いや、それは僕の方こそ君の気持ちを考えなくて悪かったと思つているよ。今日は随分元気そうに見えるけど、調子は良くなつたのだね」

「何とかね。でもバイオリンは駄目だがね。二、三年弾かなかつたら治るかも知れんと思つていたが、駄目だね。だから最近は、弾くのは諦めて運動をすることにしてているよ。体が訛つてしまつてゐるから

ね。ぼちぼち何か仕事しないと、飢え死にしてしま
うし」

弦人はそう言つて笑つて見せた。

「実は、君に勧めたいことがあつて来たんだけど」
「勧めたいって？」

「うん、何か書いて見ないかと思つて」

「ぼくが？」

「どうだろう。君の錚々たる経歴は書くに値すると

思うんだ。それを読んだら、いまでも君の事を思い出す人はたくさんいると思うよ。それにジストニアのこともさらけ出す方がいいと思つて。ついでにそれを克服して現役に復帰した話でも書ければもつといいと思うけど、それは、いまはまだ駄目みたいだね。でも高校を出てすぐにヨーロッパに渡つて、いくつかのオーケストラを渡り歩いた話は面白そうだし、ついには憧れのドレスデンのオーケストラの、

それもコンサートマスターになっただから凄いサクセスストーリーじゃないか」

「でも、そのあとに失意の引退がくるんだよね」

「それも生々しい人生の姿じゃないか。こんな言い方は現実に苦しんできた君にとっては失礼かも知れないけど、ドラマチックだね。それにいま君はバイオリストではないが元気を取り戻して生きているようだから素晴らしいと思うよ」

「うーん。でも何故急にそんな話持ってきたの？」

「それはね」

そう言いながら、林は足元に置いた鞆から分厚い本を二冊取り出して弦人の前に置いた。それには、『ブラームス（上）』、『ブラームス（下）』と書かれていて、書名の下にいかにもフランス人らしい原著者の名前に並んで林健三訳とあつた。

「君が訳したんだ」

「そう、五年もかかったけどね。フランス人の書いたブラームス伝で、ブラームスの音楽の見方がちよつと独特なので面白いんだ。ただ文章が回りくどくて苦勞したけどね。これ献呈するよ」

そう言つて林は本の扉を開いて見せた。そこには如何にも物書きらしい万年筆の文字で、

『ブラームスに造詣の深い、親友ニ瓶弦人君に捧ぐ』とあつた。

五年も世間に背を向けて来た自分のことを忘れずに、『親友』と書いてくれていることに、弦人は胸を打たれた。

「ありがとう」

と言つて、弦人は二冊の本を手元に引き寄せた。表紙にはローランスが描いた有名な二十才のブラームスの肖像画が使つてあつた。二冊は同じデザインで、背景が色違いになっている。

「よくこの絵が使えたね」

「まあ、ちよつと苦労したけど、良いコネがあつてね。実は君も覚えていいると思うけど、以前僕たちは、若いころのブラームスの音楽はあの髭面のブラームスよりもこつちの方がずつとイメージに合うって話したことがあるよね。それでどうしてもこれが使いたかつたんでね」

「そうだったね。特に青年時代のブラームスの音楽は、髭面からは想像できないからね」

そう言いながら弦人は本をぱらぱらとめくった。小さめの文字がびっしりと詰まっている。

「本の方はゆっくり読んでもらおうとして、実はこれの編集者が、僕が君と親しいことを知っていて、君がどうしているか聞くんだよ。何ごとかと思ったら、もし君が演奏をやめてからも元気でいるのだったら、

何かを書くように頼んでももらえないかと言うんだ」

「君がその編集者に頼んでくれたのじゃないの？」

「違うんだ。誰かブラームスに詳しい演奏家に、もちろんバイオリンでも何でもいいんだがね、この本を見せて、演奏家の立場からの意見を交えたブラームス論みたいなものを書いてもらいたいのだが、誰か知らないかって言うんだ。もちろん彼は、君のことが頭にあつて僕に水を向けたのだと思うんだ」

「それじゃあ、さつき君が言ったような、僕が経験してきたことを書くと言うのとは少し違うじゃない」

「そう、それには僕の考えも入っているんだけど。もし君が書くとしたら、仮にブラームス論、まあブラームスの演奏論でもいいけど、やっぱり君の経歴に結び付けて書くのが、リアルだし単なる論文よりもずっと面白いからね」

弦人は、かつての無気力な時期は脱していた。ただ唯一できることはバイオリンの演奏なのに、それがいまは出来なくなつたままだ。しばらく休んでいたから大丈夫ではないかと思つて弾いてみるのだが、状態は引退の時期とまったく変わっていない。バイオリンを弾くことを完全に諦めることも視野に、これから何をして残された人生を過ごすか、まだいまのところ目処はまったく立っていないなかつた。だから

林健三が持ってきてくれた話は、弦人にとってありがたかった。弦人は文章を苦手とはしていない。自分のコンサートのプログラムや、CDの解説をしばしば自分で書いてきた。

「どれくらいの分量のものを、その編集者は考えているの？」

「特に制限は無い。面白いものだったらいくら長くても構わないと言っている」

「いつまでに？」

「それも、期日の制限は無いが、この翻訳がもう書店に出たから、普通に考えて一年以内くらいじゃないかな」

「一年か。そんなの直ぐ来ちゃうよね」

「分量しだいだよ」

「やってみようか」

「よし、決まりだね。じゃあ、その編集者に連絡し

ても良いね？一度会うことになると思うけど」

「ここに来るの？こんな汚いところでよかつたらいつでもどうぞ。もちろん君と一緒に来てくれるんだろ？」

「そうなるだろうね」

話がまとまったところで、林と弦人は久しぶりに何か旨いものを食べようと街に繰り出した。最近は何オーキングを盛んにやっついて、外に出ることは

多いが、金がないので、食事は必ず自炊している。

「今日は僕が奢るよ」

と言う林の言葉に弦人は甘えることにした。

一週間後に、林が編集者を伴って弦人のところにやって来た。今度は前もって連絡があり、弦人も部屋を整えて客を迎えた。弦人自身も、散髪をし、髭もきちんと剃っていた。

「芸術出版の山根鉄二と申します。林先生にはいつも大変お世話になっておりますが、今回は三瓶先生に原稿をお願いできることになり、大変光栄に思っております。どうぞよろしくお願いいたします」

と言つて名刺を差し出した。名刺には東京の出版社の住所が書いてあった。弦人は現在の名刺など作っていないので名刺無しで挨拶を返した。

「今日はわざわざ東京から来られたのですか」

「林先生のところにはしよつちゆう来ていましたから、広島はすっかり慣れました」

山根と言う編集者は、いかにもベテランらしい落ち着いた雰囲気の男だった。年齢は林や弦人と同じくらいに見えた。林の紹介によると、山根もブラームスの音楽が好きで、林の翻訳中は二人でブラームス談義に花が咲いて、仕事が捗らないことがしばしばだったと言う。

それだけでなく山根は、弦人の引退の一年位前のリサイタルを聞いていたのである。そのころ既に弦人の右腕のジストニアはかなり進んでいて、静かに長い音を伸ばすようなときに、弓を持つ腕が震えて、聴衆にも聞こえるくらいの雑音が出始めていた。それでもまだそのころは、調子の良し悪しがあつて、良いときには自分でも治つたのかと思うほどなのだが、次の日には信じられないほどの不調になつて、

チューニングさえもうまく出来ないこともあつた。山根が聞いたたという演奏会が何時、何処のものなのか弦人は気になつた。林が言つた。

「三瓶君、山根さんは君がジストニアで苦しんでいたのを知っているんだよ。日本だけでなく、アメリカまで行つて医者にご相談したり、治療に良いかも知れないと言われたあらゆる方法を試みたりしたこともね。実は山根さんが聞いた君のコンサートは、コ

ンデイションが非常によくないときだったと思うよ。それから彼自身音楽家のジストニアについて調べ始めたくらいだからね」

「林先生がおっしゃるとおりです。私は三瓶先生のあのリサイタルで弾かれたブラームスの《バイオリン・ソナタ第三番》のアダージョ、たしかにあなたの弓は震えて、思い通りに動いていなかったと思いますが、それでも深い感動がありました。私の周り

の聴衆もみなそれを感じていたと思います」

「ありがとうございます。でも『先生』は止めて下さい。とにかくあのころはもう弓の震えは隠しようがなくなっていましたからね。僕は治療が出来なかつたら引退しようと考えていました。だから自分の演奏家生命が終わりかけていることに覚悟は出来ていたので、弾いている最中に右腕が震えだしても、それを止めようとせず、構わず音楽に集中し続け

ることにしていたのです」

「そうでしたか。たしかに非の打ち所が無いような完璧なテクニックで演奏されたものは、傾聴の価値があります。必ずしもそうでない場合でも、十分に音楽が成り立つことが先生の演奏は証明していただいですね」

一度ある人物を先生と呼び始めると、なかなか止められないものだ。山根はそれから随分の間三瓶の

ことを『先生』と呼んでいたが、知らぬ間に『三瓶さん』になり、『弦人さん』になっていった。

「いや、そんなに言われるようなものではありません。あのとき僕は必死で弾いていましたが、やはり聞く人たちに余計なプレッシャーをかけずに、気持ちよく音楽に身をゆだねてもらうのが、演奏家の仕事ですよ。調子の良いときもあつたので、ついあれから一年半近くも粘りましたが、絶不調のときもあ

って、今考えるともつと早く引退すべきだったと思いますね。その方が僕自身人間として立ち直るのが早かったかもしれません」

それから三人は、ブラームスの音楽について、林健三の訳したブラームス伝について大いに話が盛り上がった。

結局、弦人は山根を担当編集者として、林の翻訳したブラームス伝も考慮しながら、弦人が経験して

きたブラームスの演奏を振り返る形で書くことになった。分量は三百枚程度、一年くらいで仕上げた欲しいということになった。

これまでに自分で書いたと言っても、CDやプログラム解説は短文である。弦人は三百枚というボリュームがどれほどのものか経験が無かったが、音楽に理解のある林や山根に囲まれて仕事ができることが楽しみになってきた。

まずは、林健三訳のブラームス伝、上下二巻を読まなければならぬ。上下あわせて六百ページ以上ある。読み始めると、林自身言っていたように文章はまわりくどく、表現はわかりにくいところが少なくない。これは翻訳者の林が意識を快しとしないためもあるのだろうが、弦人はもう少し読みやすい文章にして欲しいと思うことが何度もあつた。しかも今度の場合、ただ読み流すわけに行かない。次に自

分が書くものにある程度反映させなくてはならないのだ。弦人は読書ノートを作って、原作者のブラームス観が現れているところをメモし、それが何ページに書いてあるかをわかるようにしながら読みすすめた。弦人は上下二巻を読み終えるのに一ヶ月かかった。

林の訳本を読みながら、自分が書くものの構想もある程度頭の中に出ていった。弦人は、ブラーム

ス伝を読み終えたのを機に、旅行に出て自分の本の構想を本格的に仕上げることにした。

〔二〕 コンサート

原稿の構想を練るための旅行は、北海道にした。残り少ない貯金を下ろして行く。まだ一行も書いて

いないのに原稿料が入るだろうと、弦人は獲らぬ狸の皮算用をした。

舞鶴まで車で行き、小樽行きフェリーに乗る、小樽から北海道の日本海側を走って稚内へ、利尻に渡って島の海岸線を一周している道路を歩き、さらに礼文島に渡ってからも歩く。礼文から稚内に戻ってからは斜里岳を見て小樽へ、そして再びフェリーで舞鶴へ。そこからは山陰海岸を走って三瓶山の麓

を締めくくりとして歩いてから帰宅する。全部で一泊十二日の旅行である。帰宅したら旅の間に固まった構想をもとに直ちに執筆にかかる。これが三瓶弦人の執筆計画だった。

一人車で北海道の真っ直ぐな道を走り、利尻、礼文を歩きながらなら、依頼されたブライームス論の構想は間違いなく仕上がる。と弦人は期待と意欲に溢れていた。

予約したフェリーの舞鶴出航は六月二十二日午前〇時三十分。六月二十一日には早朝に家を出て舞鶴まで一般道を走る予定である。広島舞鶴間はおよそ四百キロ弱、一時間三十キロ平均で計算すると十二時間、したがって朝七時に家を出れば夕方七時ころには舞鶴に着くことになる。途中でゆっくり休憩をとれるし、舞鶴に着いてから夕食をする時間も充分にある。

その北海道旅行の出発日は、弦人のもうひとつの重要な予定に合わせて決めた。それはドレスデンから来日しているオーケストラの演奏会を岩国に聞きに行くことだ。かつて弦人はこのオーケストラで在任期間は僅か七年だったが、コンサートマスターを務めた。退団してから二十五年経っている。弦人がコンサートマスターをしていた時期に在籍していて、

いまも残っている団員の数は少なくなっているだろう。しかし弦人としては、ぜひこのオーケストラを聞きたいし、顔見知りの団員にも会いたかった。

コンサートのメイン・プログラムはブラームスの《交響曲第一番》である。若いころ、このオーケストラが名指揮者ザンデルと演奏するブラームスのこの曲をレコードで聞いて、このオーケストラに入つてブラームスを弾くことがバイオリン研鑽の目標に

なつた。そしてその夢を実現させて実際にこのオーケストラのコンサートをマスターとしてブラームスを何回も弾いた。

弦人が退団してから、このオーケストラは二度ほど来日しているが、そのどちらも弦人は自分の演奏会の都合で聞けなかつた。今回が初めてのチャンスなのだ。

弦人は客席で、年に似合わず胸をときめかせなが

ら開演を待った。明るくなつた舞台に団員が登場する。すぐにそれとわかる懐かしい顔がいる。風貌は当時と変わっていても知っているメンバーは何人もいるに違いない。弦人は、演奏が終わったら楽屋に彼らを訪ねるつもりだ。

弦人がコンサートマスターになつたときはザンデルがまだときどき指揮をしていたが、この日の指揮者は奇しくもそのザンデルの息子だつた。しかし、

弦人がいるころはまだほんの子供だったはずで、弦人はこの指揮者のことを知らない。ザンデルにはもう一人やはり指揮者になっている息子がいて、そちらの息子が録音したCDを弦人は聞いたことがあった。オーケストラは違うが、父親の音楽をさらに敷衍したような悠然としたブラームスを聞かせていたので、この日指揮をするもうひとり息子にも期待した。

弦人が憧れて入団した大指揮者の息子が同じオーケストラを指揮した同じブラームスであつたが、随分と違う演奏だつた。こちらの息子は、父親とはまったく違うタイプの演奏をした。彼は完全に最近のオーケストラの傾向を体現しているようだつた。

オーケストラのメンバーも多くが世代変わりしているのだから当然である。しかしそうは言つても弦人は、ヨーロッパのオーケストラによる良いブラー

ムスを久しぶりに聞いて満足だった。

弦人は、終演後楽屋に行つて何人かの顔見知りに出会った。しかし二十数年も経つていて、しかもその間このオーケストラのメンバーとは、誰とも連絡を取り合っていない。それだけでなく現在弦人は演奏家ではなくなつてしまつて、音楽的な活動もしていない。顔見知りに会つても、

「やー、元気か」

程度の会話しか無かった。

弦人は、まあそんなものだろうと思つて、早々に楽屋を後にした。頭の隅では、指揮者にも会つて、

「あなたのお父さんの時代に、ここでコンサートマ
スターをしていた」

と自己紹介しようかとも思つたが、

「それがどうした」

というだけで終わりそうだったので、指揮者に会う

のは辞めにした。

弦人にはこの日、それよりもはるかに印象的なことがあつた。楽屋から出て一般の通路を、出口に向かつて歩いていくとき、弦人の斜め前を亜麻色の髪をした女性がゆつくりと歩いている。弦人は、その女性を追い越すときにチラツと振り返った。振り返って見たのには、何となくと言う以上の意味は無かつた。しかし、彼女の顔を見た瞬間思わず、しばらく

く目が離せなくなつた。二十才のブラームスの肖像画にあまりにも似ていたのである。林健三が翻訳したブラームス伝の表紙に使われているローランスが描いた若きブラームスの肖像画である。もちろんブラームスは男性であるが、その肖像画を見たことがある人はお分かりと思うが、女性と見てもおかしくないような甘い表情に描かれている。その女性は、やや日本人離れした感じを持っていて、亜麻色の髪

も染めたものではないかも知れない。若くはないが感じの良い人だった。弦人が見つめていた時間が長かったので、その女性も気がついて弦人を見た。弦人は慌てて微かに会釈して視線を離した。弦人はそのまま速足で出口に向かったが、しばらく進んだところで振り返った。そのとき出口に向かう人々の陰に見え隠れしていた彼女と、また視線が合ったが、弦人はそのまま帰路に着いた。

車で帰る途中も、弦人は彼女の柔和で落ち着いた雰囲気と、少し憂いを含んだような表情が忘れられなかった。

この日弦人の目的は、かつて自分が所属していたオーケストラのブラームスを聞き、旧知の楽団員に会うことだったはずだが、いまや弦人の心の中は若いときのブラームスの肖像画に似た女性の印象に入れ替わっていた。とは言うものの、岩国のコンサー

ト会場で見かけただけでは、この地域に住んでいる可能性があると言うだけで、二度と会う機会はありそうにもない。そういう人がいたと言う記憶が弦人の中に残るだけである。

弦人は、できることならもう一度出会いたいと思つた。

〔三〕 舞鶴発、小樽行きフェリーで

翌六月二十一日の朝、弦人は六時に家を出た。計算上はそんなに早く出なくても充分間に合うことはわかっていたが、車で移動するときには、過剰なくらいの余裕を見てちようどよいということをし、弦人は長年の演奏家生活で身につけていた。演奏家にとつて遅刻は絶対に許されない。それは練習であつても

本番であつても同じである。多くの演奏家仲間が集合時間の一時間前を目標に行動するのが常識となつていくくらいである。それでも一旦渋滞に巻き込まれたら、一時間くらいの余裕はあつという間になくなつてしまふ。

この日は途中何の問題もなく、午後五時前には舞鶴港のフェリー乗り場に着いた。乗船手続きをするとき、十一時四十五分に乗船が始まるから遅れない

ようにと念を押された。

弦人は舞鶴市内でゆっくりと夕食をした。食事がすんだときまだ早すぎるとは思ったが、他にすることも無いのでフェリー乗り場に戻って、乗船を待つ車の列に並んだ。まだ午後七時前なのに、すでにかのりの車が並んでいた。

弦人は、並んでいる車に遠慮してボリュウムを小さめにして今回のドライブのためにたくさん持って

きていたCDを聞いた。初めブラームスの交響曲をかけたが、期待した岩国での演奏後の旧知との再会の味気ない空気を思い出して面白くなかったので、直ぐにCDを変えて、敢えてブラームスともオーケストラとも関係ない曲ばかりを聞いた。

北海道には、ドイツから帰国してソロ活動をしていたころ、二回行ったことがあるが、いずれも飛行

機だった。一度は札幌、もう一度は帯広で、いずれもコンサート会場に直行し、翌日直ぐに東京に引き返すと言うスケジュールだった。札幌のときは、主宰者の希望でピアニストが地元札幌の人だったので、一日前に札幌入りしてリハーサルをしてからゲネプロ、本番と言うスケジュールだった。帯広のときは、東京からピアニストを同行した。

以前一度共演したことがある美人ピアニストで、

音楽的にも優れた人だったが、人間的に冷たい感じが拭いきれず、弦人としては出来れば別の人を選びたかった。しかし音楽家協会がスケジュールの合うピアニストで、弦人と演奏した経験のある人として、その女性を推薦してきたのだった。彼女は東京でのリハーサルから演奏会をすませて東京に帰ってくるまで、何故か冷ややかな態度を変えなかつた。飛行機の席は行きも帰りも隣だったが、ほとんど話をす

ることもなく、弦人は仕方なく寝ているか寝たふりをしながら機内の時間を過ごした。それでも、演奏後拍手の中では満面の笑みで握手を交わし、主催者側が催してくれた簡単な打上げでの挨拶で彼女は、

「私は、三瓶先生とは以前にも一度ご一緒させていただけいたことがあり、今回はとても楽しみにしてまいりました。先生のブラームスは最高です。このよ
うな機会を与えてくださった皆様に心からお礼を申

し上げます」

などと言うのだった。席上出席者がピアニストに、弦人との共演に関することを聞いているのが、弦人の耳にも届いた。そのときピアニストは、

「実は、前回共演させていたときより何年前、先生がドレスデンのコンサートマスターをされているころでしたが、帰国してコンサートを開かれたことがあったのです。そのとき知っている方を通

じて、私は是非ご一緒させていたただきたいと申し出たのですが、断られたことがあるんですよ」

ピアニストは、周りが騒がしかったから声が大きくなつたのかもしれないが、弦人は彼女がわざと弦人に聞こえるような声で話しているのかと思つた。弦人は、そのことを知らなかつた。そのときの担当者、すでに他のピアニストが決まつていると言つて断つたのだらう。そのことで彼女は弦人に嫌われ

ていると、ずっと思っていたのかも知れない。とにかく、弦人は自分と二人でいるときの彼女の無愛想さは、あまり愉快でなかった。いずれにしても女性の扱いに慣れていない弦人は、手も足も出ない感じで、ただ触らぬ神にたたり無しと決め込むほか無かったのである。

その二回以外で弦人が北海道に行つたのは、音楽大学三年の夏休みに一人でリュックを担いで歩き回

ったときで、当時国鉄が発行していた一か月間特急以外乗り放題の周遊券を使つての旅で、四十年くらい前のことだ。

フェリーへの乗船は予告どおり十一時四十五分に始まった。弦人は四十年前の青函連絡船のイメージを持って船内に入ったが、予想とはまったく違つていて、非常にきれいな大型客船に乗つたような感じ

だったのでびっくりした。時代の流れをあらためて認識したのだった。

弦人の船室は二段ベッドが六個で一部屋になっていた。夜行列車の二段ベッドよりも一つ一つのスペースに余裕がある。しかもこの日は満席ではないらしく、全部で十二人入れる部屋に四人しか入っていないようである。弦人の向かい側のベッドには誰も入っていないので、なかば個室状態だった。空調も

程よく効いていて、弦人は快適な船旅が約束されていることを感じた。

弦人は学生時代の北海道旅行のことを思い出した。北海道の広大な風景の中を歩き回った爽やかな感動よりも、汗とほこりにまみれたベタついた印象ばかりが思い出される。北海道といえども真夏は、暑いときは暑い。道内の移動は当時の国鉄の列車で、どの列車もカニ族と言われるリュックを背負った若者

たちで満員だった。ホームに入ってきた列車は初めから満員で、デッキに乗れば有難いと言う感じで、当時車内の冷房などと言うものがあつたのか無かつたのか、とにかく汗まみれで、デッキに立ち尽くすか、荷物の間に座り込んで仮眠するかだつた。

このときのことです。必ず弦人は当時の若い自分を思い出す。帰りに青函連絡船が函館を離れるときは空気が爽やかで、残照に浮かび上がる駒ヶ岳の姿をい

つまでも眺めていたが、夜の青森駅のホームに降り立つと、打って変わった蒸し暑さで汗で体中がベタベタだった。上野行きの寝台列車の上段が弦人のベツドだった。寝ていても天井に手が届きそうな上段のベツドの中の蒸し暑さは相当なものだった。乗車したら既にベツドはしつらえてあつて、翌朝みんなが起きて普通の座席になるまでは、ベツドの中にいるしかない。寝苦しいのか狭い通路に出て暗い外を

見ている人やタバコを吸っている人もいた。

弦人は寝付かれないまま寝返りを繰り返していた。情慾に任せてごそごそしている私のベッドの下の段にも乗客はいた。着の身着のまま、汗で汚れた下着は気持ちが悪く、汗をかくばかりで朝になっても不快さは減ることはなかった。その不快感から解放されたのは、東京の下宿に帰って、銭湯をすませたときだった。

それに比べると、弦人は今回下の段だが、この船の二段目も天井は高く冷房も効いて室内は爽やかである。しかし、四十年前のようにむらむらと沸いてくるものはいまの弦人には無い。

弦人は船内を歩き回って見たが、出航したのがすでに夜中の〇時三十分、乗客たちはみなそれぞれの部屋におさまっているようだ。弦人も自分の部屋に戻って寝ることにした。ベッドに横になってから、

今回の旅行は著作の構想を練ることが目的であること
を思い出したが、朝早くから運転してきた疲れが
出て、底鳴りするようなエンジンの音を子守唄に弦
人は何も考えないうちに眠りに落ちてしまった。波
も静かで船はまったく揺れを感じさせない。弦人は
外が明るくなるまで眠り続けた。

目を覚ましたとき、もうすっかり夜は明けていた。
海には白波ひとつ無く、船は静かな水面を進んでい

る。弦人は顔を洗って、後部にあるオープンデッキに出た。四方に島影は無く、行き交う船の姿も無い。何処を目指して走っているのかわからないような海原の中を、進むべき方向にはつきりとした自信があるように船は淡々と進み、自らが残した航跡が遙か後方まで延びている。

弦人はオープンデッキにある椅子に座って、穏やかな海と航跡、それに水平線をいつまでも眺めてい

た。執筆の構想を練るでもなく、ただ海を見て座っているだけだった。何かを思い出すことさえなかつた。弦人はいつの間にか居眠りをしていたが、ふいに空腹を感じて部屋に戻り、昨日買っておいだパンとペットボトルの茶で朝食をすませた。それからベツドに横になつて、原稿の書き出しを少し考えた。

四十年前の北海道旅行から書き始めようかとぼんやり思った。書き出しを考えながらも、そもそももの

主題となるブラームス論、あるいはブラームスの演奏論をどう書くのかまったくイメージがわいていなかった。ただこれまで歩んだ自らの演奏家への道や演奏家として経験したあれやこれやが羅列的に思い浮かぶばかりだった。

それから弦人は少しうとうととしていた。目が覚めてトイレに行つたついでに、また船内をぶらぶらした。退屈し始めた乗客も多いらしく、当ても無く

ぶらついている人も多い。弦人は、午後ビンゴ大会とマンドリンのミニコンサートがあるというポスターを見つけて、それらを見に行くことにした。

ビンゴ大会で弦人は絵葉書セットを当てた。このフェリー会社の運行中のフェリー五隻が写っている絵葉書である。弦人はその一枚一枚を丁寧に見ながら、同じ会場で開かれるミニコンサートを待った。

やがて六十くらいだろうかあまり風采の上がらない男が、マイクやアンプ、自分が演奏のときに座る椅子などを用意し始めた。一人だけで助手のような人の姿は見えない。どうやら彼がマンドリン・コンサート的主人公らしい。船の人は誰も手伝わないようだ。

弦人は自分の演奏家としての晩年を彼に重ねていった。ジストニアが進んで思うように演奏ができなく

なり始めると、自分自身演奏に対して消極的になると同時に、演奏の依頼も極端に減った。弦人が世界的に知られたドレスデンのオーケストラのコンサートマスターに就任したニュースは国内でも報じられた。ただ東ドイツのオーケストラだったので、歴史ある優れたオーケストラだったにもかかわらず、報道はごく小さいものだった。それでも帰国するたびに演奏の依頼がかなりあった。

弦人は、オーケストラを辞めて帰国してから約二十年間演奏活動を続けたがその最後となった演奏会を思い出した。それは親しくしていたある内科医の自宅でのホームコンサートだった。その内科医は、弦人のドレスデン時代からの知り合いで、常に応援してくれていた一人である。

開演に先立って内科医は挨拶で、弦人が演奏家として致命的なほどの重いジストニアに侵されていて、

おそらくこれが人前での最後の演奏になるかも知れないことを集まった客たちに伝えた。そして、必ずしも充分と言えないコンディションではあっても弦人の、ブラームス本人が演奏しているようだと叫ばれる演奏を、しつかりと心に刻んで欲しいと呼びかけたのだった。

弦人のジストニアは、症状が軽いときも重いときもあった。そんな状態が二、三年続いていたが、こ

の内科医の家での演奏会のおときは、すでに良いとき
というのとはほとんど無いほど重症になっていた。そ
のような演奏家の伴奏をプロのピアニストに依頼す
るのはあまりにも失礼になると考え、弦人と内科医
は相談して、すでに嫁いでいる内科医の娘がピアノ
を弾くことになった。彼女は、子供のころから熱心
にピアノを習っていたが、純然たるアマチュアでブ
ラームスのテクスチャーを弾きこなす力があるとは

言いがたかったが、弦人もそれで良いと言つて、何
度も練習を重ねた。このとき弦人は《バイオリン・
ソナタの第二番》とブラームスの歌曲を数曲バイオ
リンで弾いた。

世界的な水準の演奏さえ可能としてきた弦人と、
本来その段階には程遠いところまでしか到達しな
かったピアニストとの共演は、しかし心温まる演奏を
なしえたのだった。

いま目の前で自分の演奏会の全てを一人で準備しているマンドリン奏者が、そのときの弦人と同じ状態と言うのはいささか礼を失した言い方になるが、弦人はついそのときの自分の姿に重ねてしまうのだった。

ビンゴ大会が終わって一旦会場は人気が少なくなっていたが、ミニコンサートの開演時間が近づくと再び人々が集まってきた。

それらの中に、三人連れの婦人が談笑しながら弦人の席から五メートルくらい離れた席に着いた。賑やかな話し声にそちらを見た弦人は、三人の中の一人が、岩国で見かけた若いときのブラームスの肖像画に似た人ではないかと思つた。見つめる弦人に氣付いたのか彼女も弦人の方をチラッと見た。その視線は間違いなくあの岩国のコンサート会場にいた女性だと弦人は確信した。

彼女はすぐに視線を逸らすと、亜麻色の髪を留めていた髪留めを外してテーブルに置き、髪を整えてから、再び耳の上の辺りで留め直した。そうしながら友人と話す笑顔は実に美しいと弦人は思った。女性には飾り気が無いが品の良い白っぽいブラウスを着ている。弦人はそれが彼女の性格を表しているように思った。弦人の位置からは、舞台の方を見るとその視界の中に彼女の姿が入るので、弦人はずっと彼

女の表情を見ることができた。演奏が始まると、音楽に聞き入る彼女の表情もまた素晴らしい。彼女の音楽に集中する表情に現れているとおり、マンドリンの演奏は、弦人が思っていた、一人で準備している男性のうらびれたイメージとはまったく違って、聞くものを引き込む力を持っていた。演奏されたのは古くから親しまれている日本の歌を中心としたものだったが、どの曲もしみじみとした懐かしさが聴

衆の心に広がっていったのだった。

コンサートは、ミニと銘打っている通り四十分足らずで終わった。若いブラームスに似た女性の三人組はコンサートが終わると直ぐに会場を出て行った。出て行くとき例の女性はチラツと弦人に視線を送った。

弦人はしばらくそこに座ったままで、始まる前と同じように一人で後片付けをするマンドリン奏者を

眺めていた。さすがにプロだと思わせる彼の力量からすると、案外いろいろなところから声がかかっているのかも知れない。このフェリーのミニコンサートの仕事も、準備などの慣れた感じからすると何度も頼まれているのであろう。

カフェの中には二、三組がコーヒーを飲みながら寛いでいる。弦人もその場に座り続けていた。

弦人は、ぼんやりと自分のこれまでの人生を思い返していた。常に上を目指して、というより上を目指すように親や教師から定められて、飽くなき努力を続け、努力に見合っただけの見返りを得てきた人生の前半と、腕の不調の兆しが現れてからの人生の後半についてである。まだ自分の人生は終わっていないのだが、新たな生きがいを見つけるには至っていない。あのマンドリン奏者は、何歳なのだろうか。

大いなる生きがいを感じながら今の人生を歩んでいくのだろうか。

そこまで考えてきた弦人は、偶然にも再び出会った二十才のブラームスの肖像に似た婦人のことが意識に現れた。たしかに先ほどは友人と共に楽しそうに話していたが、マンドリンのメロディに耳を傾けているときの表情には憂いが宿っているように見えた。

弦人は、彼女もこの旅行を楽しみだけの観光旅行としていたのではないのかと思うのだった。彼女の思慮深そうな瞳に宿っている憂いは何から来ているのだろうか。弦人は原稿の構想とは関係ないところで、いろいろな思いを頭の中で堂々巡りさせていた。

弦人が航海中にあの女性を見たのは、ミニコンサートの会場と、下船のときの二回だけだった。

弦人は、奥尻島など北海道の陸地が見え始めた夕方、オープンデッキに出て陸地の山々を眺めた。それらの頂にはまだ雪渓が残っている。陸地が見え始め、夕焼けもきれいだったのでたくさんの乗客がオープンデッキに出てきていた。しかし、あの女性の姿は見えなかった。

弦人は、船員が教えてくれた、

「見通しが良い日には羊蹄山が見えることがある」

と言う言葉を信じて、陸地側を一時間以上凝視していた。結局日が暮れて暗くなるまで羊蹄山と思える山影は確認できなかつた。そして原稿の構想が何も進まないうちに午後八時、小樽入港の時間になつてしまつた。

荷物を纏めて下船のためロビーに行くと、すでにたくさんの人たちが集まっていたが、下船はまだ始まつていなかつた。その中に、ある新聞社の名を冠

した旅行社の旗を持った男性ガイドの前に並んでい
る一団が弦人の目に留まった。その列の中に例の女
性が並んでいる。さっきのミニコンサートのときと
は違って、ジヤンパーを着込んで北海道の気候に備
えたような服装になっている。弦人は彼女の方を見
た。彼女も気付いたのか弦人の方を見ている。視線
が合った。弦人は長い時間そうしていたように思っ
たが、やがて車両甲板に降りる案内があつて、弦人

はその行列に従った。

弦人は、このフェリーの『とくとくとくプラン』と言うのについている小樽市内のホテルに一泊した。同じフェリーから降りた人たちがかなりそのホテルに入ってきたが、あの女性の団体は来なかつたようである。

フェリーでは何もせず、眠くなつたら昼寝をして過ごしたので、弦人は今晚こそ構想を練ろうと思つ

たが、十時にもならないうちに眠くなつて寝てしまつた。翌日こそ北海道の広大な大地を快適に走りながら構想作りが進むことを期待したのだつた。

〔四〕 北海道で

六月二十三日、弦人は小樽のホテルで目を覚まし

た。いよいよ北海道である。弦人はホテルの近くのコンビニで朝食用のパンと飲み物を買ってから、稚内に向かつて走り始めた。構想を練るには景色も天気も良過ぎる。弦人は構想のことなど忘れて、気持ちよく車を走らせた。

雄冬岬の展望台で穏やかな日本海の眺めや、後ろに聳える柱状節理の岸壁を眺め、増毛の暑寒別川口からは雪溪を残した暑寒別岳を眺めた。

苫前で道の駅の駐車場で車の中で一泊した。ホテルと違って熟睡は出来ないだろうから構想を練るのにちょうど良いと思ったが、夜になって雨が降り出し雷まで鳴りだした。車の屋根を打つ雨音と稲光で、構想どころではなくなった。

翌二十四日は夜中の雨が嘘のように晴れた。

弦人は、開拓者の集落がヒグマに襲われた有名な事件の復元現場に行ってみた。それはかなり海岸線

から山地に入ったところで、途中苫前町の市街を過ぎると、農地や牧草地が広がり、農家が散在する寂しいところが奥の方まで続いていた。十数キロ入り家も農地も途切れて少し行つたところに三毛別熊事件跡地と言うのがあつた。いまでも熊が出そうなところで、弦人は恐るおそる復元された小屋の中を覗いた。本当に隅の方の薄暗いところに熊がうずくまつていそいな雰囲気である。案内板に、『熊出没注意』

と張り紙がしてあつた。

苫前からそう遠くないサロベツ原野は、四十年前に当時の国鉄に乗って来たところで、道路やビジターセンターなどが出来ていて、当時とは様変わりしていたが、弦人にとっては懐かしいところだった。昔歩いたところを思い出そうとして、ここでかなり時間を使った。

そのあとはノシヤップ岬を回わり、稚内市内で翌

朝早く利尻に渡るフェリー乗り場と駐車場などを下見した。予約してある宗谷岬のこの日の民宿には午後六時ころ着いた。

翌二十五日早朝宿を出て、稚内港からフェリーで利尻島に渡った。稚内に戻ってくるまで車は使わないので、昨日下午見しておいた無料で駐車できる所に車を置いた。たくさんの車が停まっていた。

利尻島も礼文島もすっぽりと雲をかぶっていてフ

エリーが近づいても何も見えない。しかし弦人は、利尻の鴛泊に上陸すると、直ぐに歩き始めた。時計回りに途中で二泊しながら島を一周する。一日目は鬼脇までの二十キロ、二日目は沓掛までの二十二キロそして三日目が十五キロ歩いて鴛泊に戻ってくる。歩く距離としては三日とも弦人にとってたいしたことではないのだが、一日目は相当くたくたになった。しかし鬼脇でも沓掛でも温泉につかって元気になり、

利尻島一周を完歩した。とくに三日目、風は強かつたが快晴に恵まれ、心行くまで利尻富士を堪能することが出来た。しかし肝心の原稿の構想はまったく進まなかつた。と言うより、構想のことなど歩いてゐる間一度も考えなかつた。

三日目は鴛泊港からすぐにフェリーで礼文島の香深に渡り、北の端に近い船泊まで約二十キロを歩いた。これがかかりきついと弦人は思っていたが思い

のほか順調に歩けた。予約していた宿に着くのが予定より遅くなつたが、何とか夕食には間に合つた。

その宿に、観光バスが駐車していたので、弦人はあの女性の参加しているグループかと期待したが、そんな偶然があるはずがないと思ひ直した。もちろん別の団体だつた。

翌二十八日、弦人は宿からそう遠くないスコトン岬に行つてから、ふたたび香深まで戻り最終便でこ

の日のうちに稚内に渡ることになっている。時間が無いので、いわゆるトレッキングコースなどは歩かないことにした。しかし江戸屋というところから丘陵に登って、スコトン岬までお花畑を歩いた。

南の空には朝から黒い雲があつたが、上空はよく晴れていた。まったく樹木のない丘陵に登ると、渋滞するほどの観光バスと、バスから降りてガイドに従って散策する人たちでいっぱいだった。小旗を持

つて団体の先頭を歩きながら、あちこちで立ち止ま
つては植物や風景の説明をするガイドの話盗み聞
きしながら、弦人もそれらの流れに従ってゆるゆる
と歩いた。

足元の花ばかりに気をとられて歩いていた弦人は、
突然陽が翳り湿った風を感じて振り返ると、上空に
真つ黒な雲の塊が覆いかぶさるように迫っていた。
それは不気味なほどの黒さで、空だけでなく南側全

体が黒い霧に閉ざされている。散策していたどの団体も、ガイドに誘導されて大急ぎでそれぞれのバスに逃げ込み始めた。弦人は逃げ込むバスが無いので、はるか前方に見えているスコトン岬の土産物屋があるところまで急ごうとした。しかしすでに真昼の稲光とともに大粒の雨と強風が襲ってきた。そのときたまたま弦人が通り抜けようとしていた観光バスのガイドが、

「入りなさい」

と言つて弦人をバスに避難させてくれた。猛烈な雷雨と突風がバスを揺らした。バスの人々は声も無く激しく窓に降りかかる雨と屋根に打ちつける雨音、それに混じつて絶え間ない雷鳴と風の音に耐えていた。

激情的な嵐はほんの数分で勢いを減じ、黒い嵐の塊はスコトン岬を覆い隠し、さらにその北のトド島

を覆い隠しながら走るように北に去っていった。弦人たちがいる丘陵に太陽の光が戻り、濡れた草の葉が一斉に露を光らせ、風に吹かれては水玉をゆすり落としている。

弦人はバスガイドと運転手に礼を言い、乗客の方に向かってでも避難させてもらった礼を言った。頭を上げたとき、弦人を見つめている視線があつた。弦人は再び稲光に遭つたような衝撃を受けた。舞鶴か

ら小樽までのフェリーで見たあの女性ではないか。弦人とその女性は時間が止ったように見つめ合っていた。おそらくはそれは一瞬だったはずだが、弦人にとっては長い時間に思えた。

弦人はバスを降りた。観光バスは嵐をきっかけに移動の時間が来たのかスコトン岬のほうに降り始めた。弦人もそのまま岬に向かった。しかし弦人が歩いて岬に着いたとき、駐車場には何台もの観光バス

が停まっでいて、弦人は見回したがどれがあの女性
が乗っていたバスなのかわからない。

スコトン岬では風が強く寒かった。ここにも観光
バスはあとから後からやって来て、バスから降りた
観光客たちは岬のモニュメントの前で写真を撮った
り、みやげ物を買ったりと人々の流れが途切れるこ
とがなかった。新たな観光バスが着くたびにトイレ
にも長い列が出来た。弦人はそこを早々に切り上げ

て、香深に向かつて歩き始めた。そのときも次々と観光バスが駐車場に入つて来ていたし、出て行くバスも続いていた。歩き始めた弦人を追い越すように出て行く一台のバスの高い窓の中に、弦人はあの女性を見たような気がした。窓ガラスが反射して定かには確認できなかつたが、窓ガラスの中のその女性も、弦人の方を見たと思つた。しかしそれは一瞬の出来事で、バスは弦人のことなど無関係に通ら過ぎ

て行つてしまつた。

いずれにしても、彼女の団体も二十八日にはまだ
礼文島にいると言うことだ。もしあの団体も弦人と
同じ『とくとくとくプラン』を利用してフェリーに乗つ
たのだとしたら、道内のフリー期間は最大十日間で
ある。つまり十日間をいっぱいに使うと三十日の午
後十一時三十分小樽発の舞鶴行きに乗らなくてはな
らない。もし彼女たちの団体がこれから直ぐに小樽

に向かえば、今日二十八日のフェリーに乗船することも可能である。そうでないとしたら、二十九日の便か、最終日の便のいずれかである。弦人は三十日の便に乗ることが決まっている。帰りのフェリーでも一緒になる可能性が三分の一の確立でありそうだと期待した。

この日も原稿の構想などまったく考えないで、弦人はただひたすら歩いた。午後五時十五分香深発の

稚内行きフェリーに遅れないように、かなり速足で歩き続けた。その結果充分に間に合ったので、さらに桃岩展望台まで足を伸ばした。稚内行きフェリーにあの女性の団体は乗船していなかった。午後二時発の前便に乗ったか、島内でもう一泊するかどちらかである。あるいは十三時発の鴛泊行きで利尻島に渡った可能性もある。とにかく弦人は彼女たちの団体が、三十日まで道内にいることを願うのだっ

た。

稚内に戻った弦人は宿の近くの焼き鳥屋で夕食をした。二十四日の宗谷岬の民宿から利尻の鬼脇、沓形そして昨夜の礼文での夕食まで四泊続けて海の幸とやらばかりの料理に辟易としていた弦人は、思う存分肉を食べたのだった。

二十九日、弦人は斜里岳が見える網走まで行き、摩周温泉の道の駅で車中泊をした。斜里岳は、四十

年前に見て以来弦人の憧れの山である。生きているうちに一度は登りたいと思っっている山だが、今回近くまで来たが登ることにしなかつた。もしかしたら最後の機会だったかも知れない。

北海道最終日となる三十日、美幌峠を越えて途中から高速道路を使って小樽に戻ってきた。小樽市内で夕食をしてから、長い時間フェリー乗り場で午後十一時三十分発の舞鶴行きフェリーを待った。

この待ち時間に弦人は旅行に出てから初めて原稿の構想を練った。

四才から始まったバイオリン漬けの日々は、初めはただ与えられた課題をこなすだけのもので、弦人はバイオリンが嫌いではなかったが、特に音楽に目覚めていたとは言えない子供時代だった。

高校は普通校に通ったが、そのころドレスデンの

オーケストラがザンデルの指揮で録音したブラームスの《交響曲第一番》のレコードを聞いてブラームスの虜になった。それからは自らブラームスのソナタや協奏曲の楽譜を求めて、レツスンとは関係なく、でもそれらを夢中になつて弾いた。そのころ弦人は、自分はブラームスの生まれ変わりではないかと思うほど、バイオリン曲に限らずブラームスの音楽が心を揺り動かすのを感じていた。

そしてドレスデンのオーケストラに入ってブラームスの交響曲を弾きたいと言う夢を持ってからは、その夢の実現のために必要なあらゆる努力を惜しまなかった。高校を出ると直ぐにドイツに留学したのもそのためだった。

当時同じドイツでも西側の方が行きやすいだけでなく、オーケストラのレベルも高いと言われていた。ドレスデンにこだわっていた弦人だが、最初は西ド

イツに留学した。

両親は一人っ子だった弦人の進路を惜しみなく応援した。

弦人はドイツで就いた教師の勧めで地方の小さなオーケストラのコンサートマスター試験を受けて合格した。これが弦人のプロのバイオリニストとしてのスタートだった。

就職したオーケストラはドイツ南部の小さな町の

小さなオーケストラだった。メンバーは大まかに二種類いた。一つはより大きなオーケストラにいくための踏み台としてこのオーケストラに所属している者、もう一つはアマチュアに毛の生えた程度の奏者で、音楽が好きでたまらず、やっとな好きな音楽で収入を得る仕事ができることになった幸運な音楽愛好家だ。前者は当然後者よりもはるかにレベルが高く、次に目指すオーケストラのオーディションに受かる

と、さつさと退団していく。その後には、同じようにこのオーケストラを踏み台にする奏者がやってくるという具合である。

弦人も踏み台にする側であつた。しかし、ドイツ語が堪能で、演奏技術も音楽性も優れている弦人は、オーケストラのメンバーから愛された。弦人はこのオーケストラに約一年半在籍したが、同様にドイツ南部の少し大きな街の、少し大きなオーケストラの

コンサートマスター試験を浮けて合格すると、あっさりこの最初のオーケストラを退団したのだった。退団するときには団員たちから非常に惜しまれたが、より上を目指す弦人を祝福して送り出してくれたのだった。

弦人にとっては二つ目のオーケストラも次のステップへの踏み台であった。弦人の目標はあくまでもドレスデンのオーケストラである。弦人はこのとき

二十五才であつた。

このころから弦人は東ドイツの音楽事情を調べ始めていた。東ドイツから西ドイツに移りたがっている音楽家は多くいたが、弦人のように西から東に行きたがる者は多くない。ドレスデンのオーケストラは世界的に名高く、歴史的な巨匠たちが指揮をしているし、壁の崩壊前でも名指揮者たちが客演しており、西側にもそのレコードが出回っている数少ない

オーケストラであつた。

弦人はあるバイオリニストの紹介で、ドレスデンのユンケルと言う有名な音楽教師と連絡が取れるようになった。ユンケルは弦人の希望を応援すると言ひ、出来るだけ早くドレスデンに移住することを勧めた。そのための手引きもすると申し出てくれたのである。

弦人は二つ目のオーケストラの二年目の契約更新

をせずに退団を申し出た。このとき、オーケストラとしては異例のことだが、報酬のアップと、次の一年の間にコンチェルトのソリストをさせるという条件を出して弦人を慰留した。このオーケストラは、当時一地方のオーケストラからよりメジャーなオーケストラとしてのステツプアップを目指していたのである。そのために優れたコンサートマスターである弦人を手放したくなかった。しかし弦人はドレス

デンのユンケルの誘いに従った。そのとき弦人の慰留に努めた人たちは、ドレスデンのオーケストラは確かに歴史と伝統のある立派な楽団であることは間違いないが、東での音楽家の生活はここに比べたら悲惨なものだから辞めた方が良いと言って、弦人に残るように勧めるのだった。

ユンケルの手引きでドレスデンに移り住んだ弦人は、しばらくは彼の教えを受けた。ユンケルは若い

ころしばらくドレスデンのオーケストラのメンバーだった人だ。ユンケルのもとで弦人はブラームスの音楽を大いに吸収することが出来たのだった。

南ドイツのオーケストラもブラームスの音楽を愛して多く演奏していたが、ハンブルク出身のブラームスの音楽は北ドイツの雰囲気を多く持っている。ドレスデンのオーケストラには、弦人が高校時代から憧れていたそのようなブラームスの響きがあつた。

それはここに客演した名指揮者たちが作り上げてきた伝統なのかもしれない。

弦人はユンケルの推薦で一旦、ポーランドとの国境の街のオーケストラのコンサートマスターになった。ユンケルとしては、このオーケストラで研鑽を積みながらドレスデンのオーケストラの空きを待つことにしたのであった。

弦人にとって幸運なことに、ドレスデンの若きコ

ンサートマスターが突然ウィーンからの誘いで退団したため、ドレスデンのオーケストラはコンサートマスターの後任が必要になつたのである。

ユンケルはこのチャンスに、慎重に事を運んだ。ある程度ドレスデンのオーケストラに顔が利くユンケルは、以前からそれとなく弦人のことを売り込んでいたが、今度の場合狙いは単なるバイオリン奏者ではなくコンサートマスターである。ドレスデンの

オーケストラの幹部を、弦人がいるオーケストラのコンサートに招いて、弦人のコンサートマスターの姿を事前に見せたりもしていた。このような働きかけの甲斐あって、弦人は半年間の試用期間でドレッシングの第三コンサートマスターとして仮の地位を与えられることになった。

ヨーロッパの伝統ある古いオーケストラも少しずつ古い伝統のしがらみから抜けつつあった。外国人、

特に東洋人の任用がそれであり、女性団員を受け入れない楽団がいくつもあり続けたが、それも崩れ始めていた。ヨーロッパの数あるオーケストラには日本人、中国人、韓国人などの団員はもちろんのこと、コンサートマスターもすでに存在していた。したがってその点での抵抗はあまり無かったと言える。ドレスデンのオーケストラで弦人が受けたプレツシヤ―は、むしろその若さにあつた。多くの団員、特に

年配の弦楽器奏者たちは若い東洋人がブラームスなどのドイツ音楽の精神を深く理解して演奏できるとは信じなかつたのである。彼らの中には、日本人は技術だけは優れているが音楽的表現は幼稚だと思つてゐる者が多かつた。たしかにそのような時期もあったが、弦人が仮採用されたころは、すでに日本人もヨーロッパで音楽的にも認められ始めていた。このオーケストラでは、そのような主に西ヨーロッパ

での事情に詳しくないベテラン団員たちが多かったのである。

弦人が仮採用されたとき、まだ巨匠ザンデルが音楽監督の地位にあつた。彼は高齢でコンサートを指揮する回数は少なかった。しかし幸運にもザンデルは弦人の音楽性を高く評価したのだつた。それにはザンデルとユンケルは古くからの友人で、ユンケルが事あるごとに弦人の音楽性の優秀さを吹聴してい

たことが影響していたのだ。

それもあつて、ザンデルが指揮台に立つ時には弦人がコンサートマスターを務めることが何度もあるのだった。長老のザンデルが若い東洋人である弦人を評価することに、団員たちは意外感を持って見ていた。団員たちはほとんど例外なくザンデルを尊敬していたが、同時に過去の偉大な伝統を身につけた巨匠であつて、東ドイツにあつてもより新しい音楽

の流れは隙間風のように入り込んできていた。それはザンデル以外の指揮者たちによつてドレスデンのオーケストラにももたらされ、特に若い管楽器セクションの団員たちに歓迎されていたのだつた。

このオーケストラも、遅まきながらそのような過度的な時期にあつたが、ザンデルの指揮でブラームスの《交響曲第一番》の演奏で弦人がコンサートマスターを務めたときには、団員も聴衆も弦人の素晴

らしさを認めないわけにはいかなかった。

弦人にとつてもこれは輝かしい瞬間であつた。『ドレスデンのオーケストラに入つてブラームスを演奏する』と言う夢を持ったのが、正にザンデルが指揮したドレスデンのオーケストラが演奏したブラームスの『交響曲第一番』のレコードだつたのだから。そのザンデル指揮のドレスデンのオーケストラのコンサートマスターの席に自分があるのである。

そのような人生ドラマを感激的に語るのは外野席の人間であり、テレビドラマや映画なら、客席の両親が涙を流す場面が映し出されたであろう。しかし、渦中にある弦人の意識は音楽の中にあつた。懸命に音楽に集中しながら演奏を続けた。第二楽章のバイオリンソロのところではブラームスの音楽に背筋をゾクゾクさせながら演奏した。その感動的な音楽は聴衆はもちろん、ともに演奏している団員たちにも

伝わった。

このときの演奏は、オーケストラでは忘れられない名演奏として語られた。それにはもう一つ、関係者にとって忘れられない条件があつた。それはザンデルのこのオーケストラでの音楽監督として最後の演奏会だつたのである。

ザンデルはその後何度か指揮をしたが程なく指揮者を引退した。そして団員たちは新しい指揮者の

より時代を反映した音楽作りに共感し始めた。

一方弦人は、オーケストラで弾くことに限界を感じ始めていた。ただひたすら指揮者の音楽を具現する作業は、自分の音楽を表現することと矛盾することに気づき始めたのである。それがいかに優れた指揮者、優秀なオーケストラであつても十二人の第一バイオリン奏者の中の一人として弾くよりも、弦人は自分ひとりで弾きたいと考え始めていた。

弦人がザンデルよりも新しい指揮者の音楽に馴染めなかったわけではない。弦人自身ザンデル世代ではないし、他の若い団員たちと同様の感覚は持っている。弦人の心の変化は、高校以来の大きな目標を達成してしまつた後の、いわゆる燃えつき症候群の影響もあつたかも知れない。

また弦人の両親の死も彼の心の変化をもたらしたと考えられる。両親は弦人がドイツで徐々に大きな

街のオーケストラに入るころまで健在で、息子がコンサートマスターを勤める地方オーケストラを聞きにドイツまで来たこともあった。弦人が念願のドレスデンのオーケストラのコンサートマスターに決まったときにも、その最初のコンサートを聞くためにドイツに来ることになっていた。

ところが渡欧直前のドライブ中に、交通事故に遭って両親同時に亡くなったのだった。そのとき弦人

は、葬儀のために三日間だけ帰国して、すぐにドレスデンでの初コンサートのためにドイツにとんぼ返りした。

弦人の憧れのオーケストラでの輝かしい音楽家人生は、子供るときから応援し続けてくれた両親を失うと言う悲しい出来事とともに始まったのであった。そして弦人は僅か七年で、それまでの人生をかけて獲得したドレスデンのオーケストラのコンサートをマ

スターの地位を捨てて退団すると言う選択をするのである。

帰国した弦人は、室内楽や独奏で、自分の思い通りの音楽をする道を選んだ。オーケストラよりもその方が自分に向いていると思った。帰国後国内の複数のオーケストラからコンサートマスターの誘いがあつたが、弦人はいずれも断つた。

七年とはいえ世界的オーケストラであるドレスデ

ンのコンサートマスターとしての経歴がものを言つて、コンサートオファ―は徐々に増えていった。そしてその演奏の質の高さ、特にブラームス演奏が評判となつて、短期間で国内では名を知られるようになった。その後の二十年間は、弦人の音楽家人生で最も充実した時期であつたと言える。

しかしそのような順風状態は続かなかつた。弦人が円熟した最盛期を迎えようとしていた五十を過ぎ

たころから、弓を持つ右手にジストニアの症状が現れ始めたのだ。

ジストニアは多くの音楽家が悩んでいるにもかかわらず、その原因も治療法もわかっていない厄介な病気である。弦人は難病を克服するため、あらゆる方法を試みた。アメリカに良い医者があると聞けば出かけて行つた。しかし、見るべき成果は得られなかった。

原稿の大筋はこのような弦人自身の経歴を辿りながら、そのときどきに弦人が感じたブラームスの音楽を、林健三の翻訳したブラームス伝に書かれたブラームス論と対比する形で書いていくことにした。

ここまで考えたとき、弦人はドレスデンのオーケストラがザンデルの指揮で演奏したレコードからドライブ用にダビングしたブラームスの《交響曲第一番》を聞きたくなくなった。北海道に向かう舞鶴港で同

じようにフェリー待ちの時間に聞こうとして止めたCDであり、高校時代にブラームスにのめり込む切っ掛けとなった演奏である。そのCDに入っている演奏は、もちろん実際に弦人がザンデルの下で演奏したものよりもずっと前の、ザンデルの全盛時代の録音である。

弦人は北海道旅行中いくらでも車で音楽を聞いたのに、一度も聞かなかつた。いま久しぶりに耳にす

る音は、何の抵抗も無く心に入ってくる。弦人はこの響きの中に自分のブラームス観の原点があることを思い出した。その思いが沸いて来たことで、弦人は原稿の見通しが立ったような気がしてきたのだった。

ブラームスを聞きながら、弦人はあの女性を想った。視線が合ったただけで何一つ言葉も交わしてないと言うのに。

〔五〕 小樽発、舞鶴行きフェリーで

弦人はあの新聞社の団体が乗船していることを期待したが、乗船のときに見かけることは無かった。このフェリーの乗客は、彼らが話している内容から北海道旅行の帰りという人が多いようだが、だからと言って北海道での滞在日数はまちまちのはずである。彼女たちの団体がちようど弦人と同じ日数

だということなどそうあるはずもない。とは言うものの、往きのフェリーで出合ったあの人が、スコトン岬でバスに乗っているところを弦人は見た。あの人も結構長い滞在である。弦人は、奇跡よもう一度と願ったが、このフェリーに乗っていきそうには無かった。それはフルートとキーボードによる船内のミニコンサートにあの人が現れなかったことで決定的に思えた。

翌日、弦人は船内のコインランドリーでウォーキング中に溜まった洗濯物をすべて洗うことにした。その待ち時間にロビーで新聞を読んだ。昨日の北海道の新聞などが置いてある。女性たちの話し声がするのでふと目を上げると、ロビーの反対側のソファで例の女性の仲間三人が話をしているではないか。弦人が見たのに気付いた彼女は、弦人の方に向かつて軽く会釈をした。やはり乗っていた。しかも彼女

も弦人を意識している。なんと云う奇跡であろう。もしも神という存在があるのなら、神が弦人と彼女を引き合わせようと仕組んでいるとしか思えなかつた。

弦人は、こうたびたび出会うのだから、何か話しかけても良いだろうと思つた。何処から来たのか知りたかつたし、岩国の音楽会場にいたのかも確かめなかつた。名前も聞きたかつた。出来ることなら連

絡先も聞きたかった。

弦人が彼女のところに行くために立ち上がろうとしたときだった。ほとんど同時に彼女は二人の間と連れ立ってロビーを出て行ってしまった。たしかに彼女は弦人と視線を合わせ会釈もした。弦人はそう思った。それなのにいったいどうしたと云うのだ。よく合う人だと思っただけで、それ以上の何も無かったのかも知れない。

往路のフェリーで初めて彼女を見たとき弦人は強い印象を受けた。小樽に到着して、船を降りるためにロビーに集まったときに弦人と彼女は長い時間見つめ合つた、と弦人は思った。神がかりのような偶然によつて、スコトン岬の観光バスに乗っている彼女を見た。にもかかわらず、いま彼女は弦人を避けるようにロビーを出て行つてしまつた。もしかしたら避けたのではなかつたのかも知れない。たまたま

三人は場所を変えようとしていたただけだったのかも知れない。弦人は良い方に解釈しようとした。彼女が弦人を避けるために二人に場所を変えるように促したと言うのは、弦人の思い過ぎだった可能性もある。いずれにしても弦人は運命が与えてくれた唯一のチャンスを生かすことができなかつた。

彼女は仲間と三人でカフェの方に行った。弦人は追いかける勇気が無かつた。仕方なくまた新聞を読

み始めた。新聞に目を通していても気持ちは彼女の顔が脳裏にちらついて、新聞に何が書いてあるのか頭に入らない。弦人は読むのをやめて部屋に戻ろうとした。

「すみません」

新聞をたたもっていた弦人のすぐそばで、柔らかに落ち着いた声がある。振り向くと、あの人在那里に立っていた。彼女は呆然としている弦人に話

しかけた。

「あまり何度もお会いするので、少しお話がしたくなつて・・・よろしいですか？」

弦人は、あまりにも突然だったのでしどろもどろしながら答えた。

「もちろんです。さつき僕の方からそうしようと思つたら、カフェの方に行つてしまわれたので、」

「あつ、すみません。わたくしあなたとお話ししよ

うと思つて、友達をオープンデツキに誘つたのです。あの人たちはしばらくあすこでコーヒーを飲んだりしてゆつくりするそうです。わたくしは知り合いを見かけたので、ちよつと話してくると言つてここに来ました」

そう言いながら彼女は弦人の隣に座つた。微かに女性らしい化粧のにおいがした。衣服が触れ合うくらい近く座つた彼女のふくよかさが感じられた。

さつきロビーで出会ったとき、彼女はとつさにそこまで考えて仲間をカフェの方に誘い出したのだ。

と言うことは、彼女も弦人に注目していたことになる。弦人は、話したいことがいっぱいあったのに何から喋っていいか思いつかず、ありきたりのことを聞いた。

「あなたたちも北海道滞在が案外長かったのですね」

「ええ、『フェリーで行く北海道十日間の旅』って言うツアーでしたから。昨晚は小樽を見物して、市内のホテルでした」

「舞鶴から乗船されましたよね。どちらから来られたのですか」

聞きたいと思っていたことに、案外あっさりと会話を向けることができた。

「わたくしたち三人は広島からの参加です。団体の

他の皆さんは関西やいろいろです」

「えっ、僕も広島です。僕は広島市内で五日市ですが」

広島なら、岩国に比較的近いエリアかもしれないと思つて、弦人は敢えて具体的な地名を出した。

「わたくしは大竹です。本当に近いですね」
「ほんとですね」

弦人は、シンフォニア岩国のコンサートのことを

聞きかけたが、一番聞きたいことを聞いてしまおうと、そのあと会話が途切れてしまいそうな気がしたので、わざとそれは後にした。

「北海道では、礼文島に行かれましたか」

「はい、利尻にも礼文にも行きました。スコトン岬では嵐のときあなたは私のバスに一時的に避難されましたでしょ。あの時は、あまりの偶然にびっくりしました。そのあとともバスの中から歩いていらっし

やるあなたをお見かけしました」

「やっぱりそうだったのですね。僕もバスの中のあなたに気付きました」

「あの日はまだ礼文島にいらっしやるのだから、もしかしたら帰りのフェリーは同じかも知れないと思いましたが」

彼女も弦人と同じことを考えたのだ。弦人は気持ちを落ち着かせて、

「あの日は、スコトン岬からどうされたのですか」

「あの日は礼文に泊まり。翌日は三時間コースと言
うトレッキングコースを歩きました。あなたも歩い
ておられたようですが、やっぱりトレッキングコー
スだったのですか」

「今回僕は利尻と礼文を徹底的に歩く計画でしたが、
日程の都合で礼文のトレッキングコースは行きませ
んでした。あの日は歩いて香深港まで行き、その日

のうちに稚内に渡りました」

「来るときのフェリーは車で乗船されたのでしょ。車両甲板の方に降りていかれましたものね」

「そうです、車は稚内に置いて利尻に渡りました。稚内に戻ってから少し道内を車で走り回って、昨日このフェリーに乗ったというわけです」

弦人は少し話題を変えた。

「お友達とご一緒なんですね」

「じつは、わたくし二年前に主人をなくしてから塞ぎ込んでいたら、友人がこの旅行に誘い出してくれたものですから」

「それは……。それで来てよかったですか？」

「ええ、まあ。それよりマンドリンのコンサートがあつたとき、いらつしやいましたね。あのとき私の方ばかり見ておられたのは、もしかしたら私をご存知の方だったのかと気になっていました。わたくし

もどこかでお会いしたことがあるような気がしていたものですから」

弦人は、知り合いかと思つたためではなく、あなたがあまりにも美しいのでつい見とれていたのだと言いたかつたが、そんな齒の浮くようなことが言えるほど若くはなかつた。

「いや、会つたことがある人というのとはちよつと違ふんです。僕は若いころからずっとブラームスの

音楽が好きなのですが、ブラームスの二十才のときの肖像画というのがあって、あなたがその肖像画にとっても似ていたからなのです」

「ブラームスって、髭もじやの男性ですよね」

「ところがそのブラームスも二十才の肖像画は、知的で少しはにかんだ女性のような顔に描かれています」

「そうですか。でも二十才でしょ。私はもう……」

彼女は自分の年を言おうとしたが言葉を濁した。

「でも雰囲気がそっくりなのです。その亜麻色の髪も髪形もそっくりなのです。音楽を聞いていらつしやるときの表情もです」

「ありがとうございます。わたくしも若い時分から音楽は大好きです。ブラームスもとても好きな作曲家です。でも、その肖像画というのを見てみたいですなね」

「もしよろしかったらコピーを送ってあげましょうか」

「よろしいんですか」

「おやすい御用です」

「住所をお渡ししてよろしいですか」

「もちろんです」

彼女は、ハンドバックからメモ帳を取り出して自分の住所を書くと、そのページを破って弦人に渡し

た。『大竹市白石××・・・八木孝子』。特に達筆と
言うわけではないが、女性らしいきれいな文字だつ
た。

「ありがとうございます。帰ったらすぐにコピーし
てお送りさせてもらいます。ところで、舞鶴でフェ
リーに乗る前の日、シンフォニア岩国でオーケスト
ラの演奏会を聞きましたか」

弦人は、その会場でも見かけたと思つていたので、いま目の前に居る女性と同一人物であることが確かめたかったのだ。もちろん、大竹と聞いて間違いないとは感じていたが。

「聞きました。ドレスデンのオーケストラとピアノの西原さんでした」

「それ、僕も聞いていたのです」

「そのときわたくしもあなたをお見かけしていたの

かもしれませんね。それでですかね、マンドリン・コンサートのと きどこかでお見掛けした方かと思つたのは」

「そうかも知れませんね。それにしてもあの岩国がたしか六月二十日ですから、それ以来今日までずっと似たようなところを移動していることになりますね」

「ほんとに、珍しいことですね」

そのとき二人の仲間が戻ってきた。彼女たちは弦人に軽く会釈してから、

「たかちゃんそろそろお昼に行きません」

と八木孝子を誘った。団体の昼食時間が来たらしい。

「お話できてよかったですわ。では、失礼します」と言つて、三人はレストランの方に去つて行つた。

彼女たちの後姿は、孝子が二人から弦人のことを聞かれているような雰囲気だった。

この十分足らずの出来事も間違ひなく奇跡的な偶然の続きだった。弦人はあつけなくあの女性、つまり八木孝子の名前と住所まで知つたのだ。それだけでなくブラームスの肖像画のコピーを送ると言うことで彼女との繋がりが続いているのである。弦人は夢のような出来事だと思つた。

舞鶴で上陸してからは、その日のうちにできるだ

け遠くまで走れるように、夕食はフェリーの途中ですませることにした。弦人は往復の航海で初めてフェリーのレストランに行った。夕食には少し早い時間だったので、レストランは空いていた。一度食べてみたいと思っていた、北海道スープカレーと言うのを注文した。実際に食べてみると、カレー好きの弦人にとってはそれほど好みに合う物ではなかった。

八木孝子たちが入ってくるかもしれない気にな

つていたが、弦人が食べている間には、入ってこなかった。

フェリーは午後九時に予定通り舞鶴港に接岸した。往きも帰りも静かな航海だった。そして下船するまで二度と八木孝子を見かけることはなかった。しかし、既に彼女とは二人だけの約束が出来ている。弦人の心は満たされていた。

舞鶴に上陸するとそのまま日本海側を走り、その

夜は丹後半島の道の駅に車中泊の予定だ。翌七月二日は出雲市のホテルが予約してある。無理をすればそのまま広島まで走れるのだが、この大旅行の締めくくりの意味も込めて、敢えて宿を取ったのだった。弦人は出雲の宿から帰宅する途中三瓶山の麓を通つて、西の原のウォーキングコースで十キロくらい歩いて締めくくろうと考えていた。

フェリーから降りた弦人は、舞鶴の市街地を出て

しまわないうちにガソリンを満タンにしてから、丹後半島を横断するコースを走り、海水浴場が続く海岸線に出た。地図で調べた『てんきてんき丹後』と言う変わった名前の道の駅で車中泊した。その日そこで車中泊をしたのは、弦人の車一台だけだった。一台だけと言うのも少し寂しい。ここは京都府だが、ここにもヒグマではないがツキノワグマがいる。夜中のトイレは恐るおそる辺りを見回しながら行った。

道の駅の前の国道を一晚中、散発的に車が通っていた。それと一晚中食用蛙が牛のような声で鳴いていた。

朝食は、舞鶴でガソリンを入れたとき近くにあったコンビニで買っておいたパンですませた。丹後半島の海岸線は初めて走ったのだが、久美浜辺りから先は走ったことがある。

余部鉄橋の下を通るのは三回目である。最初のと
きはいつだったか忘れたが、まだ有名な鉄骨の鉄橋
が共用されているときで、二度目はコンクリート橋
が建設中だった。そして今回はすでにコンクリート
橋が完成していて、鉄骨の橋は一部が残されて余部
鉄橋の記念公園らしいものが整備されている最中だ
った。

鳥取市内の中華料理店で昼食をとった。山陰海岸

沿いには作りかけの高速道路が断続的だが随所で無料区間として共用されている。弦人はその表示があるたびにそれに入った。

松江からは宍道湖の北側の湖岸道路を走った。宍道湖は周囲六十キロで、弦人はいつかここを一周歩きたいと考えている。

日御碕灯台は何度も来たところだが、今回も灯台の上まで登った。灯台の上からは東の方にたくさん

の風車が見えたが、遠くて少し迫力に欠けた。風車の並ぶ風景は、北海道で凄いのをさんざん見てきたし、今日ここに来るまでも鳥取県の海岸線で随分見ながら走って来たので、ここにもあると言うことを確認したに過ぎない感じだった。

日御碕灯台から出雲市内に戻ってくる道からの楽しみは、低い山並みの向こうに三瓶山がぼっこりと聳えているのを眺められることだ。この日は、うつ

すらとガスがかかかっていて、目を凝らすと三瓶山の姿がわかったが、目を逸らせるともう一度見つけるのに苦労した。

早い時間に出雲市内のホテルに入った。夕食は宿のサーブिसとしてタクシーで送り迎えしてくれると言う焼肉屋に行った。これが思わぬ拾い物で、出された島根和牛は、弦人がこれまで経験した焼肉の中では桁違いの旨さだった。旅行の最後に海産物では

ない夕食を腹いっぱい食べられたことに弦人は満足した。

夕方から天気が悪くなって、明日の三瓶山歩きは微妙な情勢となってきた。

〔六〕 旅行最終日

朝起きてみると、薄日が差していた。この分だと締めくくりの三瓶山歩きはできるかも知れない。

三瓶山は広島から近いだけでなくこの山塊の、手の内に入るが小さすぎもしないというスケール感がたまらなく魅力的なのである。しかも出雲市から眺めたときの近くの山々から抜きん出た姿も立派である。

子供のころ両親に連れられてたびたび訪れていて、

それ以来弦人は三瓶山の魅力に取り付かれています。三瓶という弦人の姓が同じだから好きになったのではないのだ。

国道九号線を西に走り、大田から国道三百七十五号線で内陸に向かった。上空全体に雲がかかっていたが、西の方に真っ黒い雲があって近づいてきているのが気になる。県道に入って三瓶山に向かう。こ

の道はところどころで聳え立つ三瓶山の雄姿が見えるのだが、今日は雲に閉ざされていて、僅かに稜線の一部が見えるだけだ。西にあつた黒い雲はどんどん近づいてくる。三瓶山でのウォークは駄目かもしれない。だがとにかくウォーキングコースのある西の原までは行くことにした。

西の原の駐車場に着いたときには、真つ黒い雲の塊がその一部を引きずるようにながら直ぐ近くま

で迫っていた。辺りはさらに暗くなり、真夏の正午ごろとは思えない暗さである。目の前の三瓶山は完全に雲の中である。たぶん山だけでなく弦人がいるところも雲の中なのだろう。

間もなく大粒の雨がフロントガラスを打ち始めたと思ったら、瞬く間にバケツをひっくり返したような降りになった。同時に雷も鳴りだした。駐車場には何台か車が停まっていたが、みなじつと車の中で

嵐が通り過ぎるのを待っている。雷も続けざまに鳴っているようだが、車の屋根を撃つ雨音が大きくてはつきりとわからないくらいだ。風も強い。

しかし十分もしないうちに雨音はスツと小さくなり、やがて灰色の縦縞のような雨柱とともに雲の塊は足早に東に遠のいて行った。小降りの雨は続いてしたが、恐怖を覚えるような嵐は去った。

息を殺すように駐車場でじつとしていた車が二台

出て行つた。

小降りの雨は、しばらく待てば止むかもしれないが、刈り込んだ草のウォーキングコースは水を含んでいる。それにまだ空一面は雲に覆われているし、遠くに去りつつあるがときどき雷も聞こえる。

弦人は西の原ウォークは中止にして、国道五十四号線に出て寄り道せずに帰宅することにした。

〔七〕 憧れの人と

弦人は帰宅するとすぐに、二十才のブラームスの肖像画と四十二才の髭のないブラームスの写真を、コピーして八木孝子に送った。封筒に八木孝子の名前と住所を書くとき胸が高鳴った。まるで高校生時代に戻ったような感覚である。

四日後に八木孝子から礼状が来た。ライラックの

透かしが入った封筒と便箋だった。

「さっそく髭のないブラームスの写真と絵を送って下さってありがとうございます。こんなに早く送ってくださるとは思いませんでした。髭のないブラームスは良い顔をしていますね。これからは、ブラームスを思い出すときは髭面ではなく、送っていたいた四十二才の顔を思い浮かべることになります。二十才のブラームスはさらに素敵ですね。でも自分に

似ているかどうかはよくわかりません。とにかくあ
りがとうございました。いつかまたブラームスのコ
ンサートでお会いできることを楽しみにしていま
す」

弦人は、これで彼女との関わりが一件落着してし
まったような気がして少し残念だった。『いつかブラ
ームスのコンサートで……』と言う言葉をぜひと
も実現したいと考えた。

弦人は、ブラームスの曲を中心にしたようなコンサートがないか注意深くチェックした。もしそのようなコンサートがあつたら、八木孝子を誘うことに決めた。

その機会はすぐにやって来た。広島のアークストラの団員で顔見知りのチェリストがブラームスの《チェロ・ソナタ》二曲を弾くコンサートがあることがわかつたのである。

八木孝子に、弦人はこのコンサートに自分は行く予定だが、もし興味があつたら行かないかと手紙を書いた。チケットを送つたりはせず、行くかどうかの返事も求めなかつた。弦人は彼女を強制したくなかつたのだ。

八木孝子はコンサートにやつて来た。フェリーでマンドリンのコンサートするときに着ていた無地の七

部袖のブラウスにゆつたりとしたベージュのスカート姿だった。

会場入り口でお互いを見つけたとき、二人は走り寄るようにして挨拶を交わした。弦人はこの日まで、彼女が来てくれることを願っていた。そして彼女の表情からも弦人と同じような気持ちを読み取れると思った。

弦人と八木孝子は並んでブラームスの《チェロ・

ソナタ』を聞いた。コンサート後はJRで帰るとい
う彼女を広島駅まで送った。たくさんの話をした。
彼女が夫を亡くしてから立ち直ってきたのには、音
樂が大きな力になったと言った。それも部屋の中で
一人で聞くのではなく、できるだけ音楽会に出かけ
るようにしたそうだ。そうしてたくさんの人たちの
中に入ることで、少しずつ自分を取り戻すことがで
きたと言っていた。だからこの日誘ってもらった

のはとても嬉しかったとも言った。

弦人は、お互いの気持ちを確認合ったような気がした。しかし、彼女はこうも言った。

「こうして一緒にコンサートを聞くのは嬉しいけど、誰かに隠れてと言うのはとても苦しいから、もし差し支えなかったら奥様もご一緒にお付き合いたいと思いますか？」

「僕だけだと、何か下心があると思うのですか？」

「とんでもないです。もしあなたがフリーの立場だったら、喜んでいつでもご一緒したい気持ちです。でもあなたも『返事は要らない』とかおっしやるのは奥様のことを気にしていらっしやるからじゃないのですか」

「まだ話してなかったのですが、僕は独り者です」
「えっ、そうなんですか。もしかしてあなたも奥様を亡くされたのですか」

「いや、まだ一度も結婚したことはありません。あんな書き方をしたのは、あなたを強制したくなかったからです」

「わかりました。では、これからはいくらお手紙しても構わないのですね」

「もちろんです」

彼女はもう弦人の身近な友達である。しかし、あ

のマンドリンのミニコンサート会場で弦人が受けた衝撃的な印象、それは生涯で唯一最大の出会いのよ
うな気がしたものだだったが、実際に二人で何時間か
を過ごし、いろいろな話をするうちに、八木孝子と
いう女性がごく普通の五十前後の女性で、弦人の心
の中で膨らんでいた神聖と言えるような存在ではな
いような気がしてきた。

彼女はたしかに二十才のブラームスの肖像画に似

ていなくはない。しかし彼女が話す内容も、表情も、笑顔も最初の印象ほど夢のような感じではなくなっていた。そのかわりふくよかな肉体を持った女性として、弦人はそれまで以上に強く惹きつけられていくのだった。

次の機会は一月後にやって来た。今度は八木孝子から封書が届いた。弦人たちは電話やメールのやり

取りも出来たのだが、なぜか手紙のやり取りを続けた。手紙には山口県の周東町で開かれるコンサート
の招待チケットが同封されていた。それはピアノ・
リサイタルで弦人も知っているピアニストだった。
日本人の一流のピアニストである。しかし弦人はそ
のピアニストの圧倒的な技術は認めていたが、聞き
に言ったあるコンサートで、シヨパンをあまりにガ
ンガン弾くのを見て、好みのピアニストではない

と思つていた。もつとも最近聞いたピアノ・トリオではニュアンス豊かな演奏で、少し見方を変えつつあった。

手紙には、彼女の知り合いであると書いてあつた。ブラームスを中心としたプログラムなので、よかつたら是非お出かけくださいと書いてあつた。弦人は必ず行くと書いた礼状を出した。

周東町のコンサート会場は、ときどき良いコンサートをするので知っていたが、実際に行くのは初めてだった。弦人が会場に着いたとき八木孝子は既にロビーにいて、笑顔で弦人を迎えた。地味だがセンスの良さを窺わせるワンピースを着ている。ピンと背筋を伸ばした姿は、背は高くないがスタイルは悪くない。

演奏はブラームスの若い時期の作品と中期の作品

によるプログラムを、彼らしい力強いタッチで弾いた後、アンコールで晩年の小品を二曲、それまでとはまったく違った雰囲気弾いて見せた。とても良い演奏会だったことを伝え、招待してくれた礼を言い、またの機会を約して弦人は八木孝子と別れた。別れた後も、弦人は彼女の存在をいつまでも隣に感じていた。

今度は、一月ほど先のブラームスの曲が一曲入っ

ているピアノ・トリオの演奏会を選んで八木孝子を誘った。彼女は直ぐにOKした。このころには、コンサートは二人にとって紛れも無くデートで、お互いにその誘いを待つようになっていた。

八木孝子はピアノ・トリオのコンサートの日もセンスの良い服装でやって来た。上品に白いブラウスを持ち上げている胸が美しい。

この日弦人はあらかじめ八木孝子に渡すメモを作

つてきていた。それには、彼女との付き合いがなくなつても構わないと言う覚悟で次のように書いた。

『あなたの僕に対する気持ちを知りたいと思います。もちろん僕が言っているのは、若者の愛の告白のように肉体的にも深く付き合おうと言っているのではなく、ありません。お互いが心の中で憧れの気持ちを持っているかどうかなのです』

直接口では言いにくかったので、出かける前に大

急ぎで書いた。必ずしも感心した文章ではないと思つたが、弦人は八木孝子にそのメモを渡した。そして、早口で

「返事は次の機会に」

と言つた。八木孝子は、何ごとかと言ふような表情を一瞬見せたが、メモをそのままバッグに仕舞い込んだ。

『次の機会』はなかなかやつてこなかつた。一か

月位して八木孝子から弦人のところに手紙が来た。やはりコンサートへの誘いだった。もちろん弦人は出かけた。

八木孝子は北海道に同行した友達と三人で来ていた。彼女は弦人に三つ折にしたメモを渡した。そのときの目の動きから、弦人は渡されたメモは、先日の自分が彼女に渡したメモの返事だと思った。そのやり取りを目ざとく見つけた一人が、

「何となくあやしいやりとりね」

と冷やかした。八木孝子は、

「そう、怪しいやり取りよ」

と冗談ぽく言い返した。

弦人は、メモが早く読みたかった。

弦人は家に帰るまで待ちきれず、頃合を見計らつてトイレに行った。メモには短い文が書かれていた。『あなた様のことは、わたくしも同じ気持ちでおり

ますが、今のままのオープンなお付き合いで良いのではないかと思っております』

当たり障りのない内容だった。弦人はやや物足りなさを感じたが、お互いの年令を考えても、まあこれが妥当なところだろうと思った。

弦人は、憧れの人との精神的な関係と言う反面、心のどこかでは灼熱の恋の期待もまったくなかったとは言えない。しかし現在進んでいる状況は、灼熱

の恋にはなりそうにない。

『身体に良いものは美味しくない』

『正しいことは面白くない』

と言う何ともつまらない人生の原則どおりである。

手紙ひとつポストに落とすのにもスリルを味わう生活は必要なくなつたことを喜ぶべきであろう。

弦人は今の流れを容認することにした。

〔八〕 八木孝子の正体

八木孝子から手紙が来た。三か月ぶりだった。内容はやはりあるコンサートに誘うものだった。それも

『ブラームスが弾くブラームスのコンサート』
と言うタイトルの謎めいた書き方がしてある。チラシの類は入っていない。その代わりに

『この手紙を受付で見せたら中に入れます』

と書いてある。手紙にはそのコンサートの日程と会場とが書いてあるだけで、それ以上詳しい説明はない。会場は以前にも一度八木孝子の招待で行った周東町で、日程も問題ない。だが

『ブラームスが弾く』

と言うのはどう言う意味か知りたくて、弦人は質問の手紙を書いた。すぐに返事が来た。

「言葉通りだと思つてください。しかし良い演奏会だと思つたので是非来てください」

質問には答えられていなかったが、もちろん弦人は行くことにした。

弦人は、きつとピアニストがブラームスの変装をして演奏するようなことだろうと想像した。しかしそれだけにしては八木孝子の言い方が何となく腑に落ちない。気になるコンサートだった。

いつもは会場の前などで待っている八木孝子だが、この日はまだ来ていなかった。会場入り口のたて看板には、

『J・ブラームス ピアノ・リサイタル』

として、例のローランスの二十才のブラームスから模写したと思われるカットが描かれている。受付で八木孝子からの手紙を見せたら、受付嬢は承知して

いると言った感じで通してくれた。入場口で受け取ったA四版二つ折りの小さなプログラムに急いで目を通した。

演奏者はジョセフィーネ・タカコ・ブラームス (Josephine Takako Brahms) と言う名前で、ドイツ人と日本人のハーフで、アメリカで活動していたピアニストと説明がある。経歴を見ると、彼女の父親はブラームス家の遠い親戚の末裔との説もあるが確か

ではないとあつた。しかし彼女はブラームスを得意としており、演奏家として三十年間ブラームスのピアノ曲を中心に弾いてきたらしい。ジュリアード音楽院の出身で、コンクール歴やこれまでの演奏歴もアメリカの主要オーケストラとの共演など、錚々たる経歴の持ち主である。ただ演奏家紹介の最後に、三年前に日本人の夫を亡くし、それ以来演奏活動を休止して日本に滞在していたが、このたび活動再開

の記念すべきコンサートを彼女の実家が近いこの周東町のホールで開くことになったとあつた。

このピアニストとは八木孝子本人のことに違いない。弦人は急に胸騒ぎがしてきた。八木と言うのは、彼女の実家の姓なのかも知れない。

弦人はホールに入ってからずっと八木孝子が入ってくるのを気にかけていたが、客としての彼女の姿は見られなかった。五百席ほどの小さなこのホール

なら、後から入ってくる人は気をつけていれば見つかるものだ。もちろん彼女も弦人を探しながら入ってくるはずだ。

一ベルが鳴つても、二ベルが鳴つても八木孝子は客席に入つて来なかつた。舞台が明るくなり客席の明かりが落とされた。弦人は八木孝子、いやジヨセフィーネ・タカコ・ブラームスが出てくるのを待た。

やはり彼女だった。離れているしスポットライトを浴びているのでいつもの見慣れた彼女と違って見えたが、確かに八木孝子だった。舞台衣装と言ってもしンプルな黒のロングスカートと白のブラウス、その上に黒と見紛うほど濃いエンジ色のチョッキを着ている。相変わらず良いセンスだと思った。ベテランのコンサートピアニストらしい悠々とした歩き方で舞台中央のピアノに向かう姿は美しい。少し笑

顔を浮かべて客席に一礼してから彼女はピアノに向かった。気持ちを整えてから、ブラームスが二十一歳のときに作曲した《四つのバラード》を弾き始めた。弦人は、第一曲の《エドワード》の最初の和音が鳴った瞬間、これはまさしくブラームスの響きだと思つた。

プログラム後半の晩年の小品集も弦人のイメージの中で理想的と思えるようなブラームスを聞くこと

ができた。特にブラームスのピアノ曲の中で弦人が最も好きな作品一一七の一の《インテルメッツォ》の澄み切った響きを聞きながら、弦人は涙を堪えることができなかった。音楽を聞いて感動したことは何度もあるが、実際に涙が出たのは初めてだった。

プログラムに書いてある通り、ブラームスを中心に弾いてきた人だけある。あらためてプログラムを見ると、師事した教師として弟子を取らないことで

知られている世界的なピアニストのカッチに教えを受けたとある。カッチのブラームスも素晴らしいが、今日の演奏も彼のブラームス観が受け継がれているように思えた。

演奏中、舞台上で弾いている人が、いまは自分の友達の八木孝子だということをすっかり忘れて弦人は聞き入っていた。彼女はアンコールとして、初期のピアノ・ソナタの中から、旋律の美しいゆっくりの楽

章を弾いてコンサートを終えた。

弦人は手が痛くなるまで拍手を送った。もちろん弦人は楽屋に彼女を訪ねようと思っていたが、今の自分とはとても同列にできないような芸術家を気安く訪ねて良いものかと一瞬ためらった。しかし、訪ねないわけにはいかない。

彼女の楽屋口にはたくさんの友人などが来ていて狭い廊下はごった返していた。弦人はその混雑がな

くなるまで後ろの方で待っていた。ほとんどの人ははけたとき、彼女が弦人を見つけて、駆け寄ってきた。

「来てくれてありがとうございます。これまで何も言わないでいてすみませんでした」と言った。いつもの気取らない八木孝子に戻っている。そして、

「これからお時間くださいますか。何人かの方と

この近くのレストランで食事をする事になったのであるのだが、是非あなたには来ていただきたくないので「

と招かれた。弦人は参加させてもらおうと返事した。

食事会に集まったのは、コンサートを企画運営したスタッフが五名くらいと八木孝子と彼女の母親と弦人だった。母親というのはプログラマーにあつた、ブラームスの末裔かもしれないと言うドイツ人男性、

つまり八木孝子の父親と結婚した日本人の女性である。弦人はたまたま母親の隣の席になった。のちのち弦人とこの母親とは一方ならぬ関わりを持つことになるが、このときはお互いに何も知らない。

またスタッフの中には北海道旅行で八木孝子と一緒ににいた二人も含まれていた。弦人はいきなり誘われた会だったが、八木孝子以外にも知った顔がいたので、親しみの持てる会と感ずることが出来た。冒

頭、彼女が挨拶した。

「引退を考えていたわたくしを今日まで励ましてくださった皆さんに、心からお礼を言います。コンサートをやるように勧めてくださった方たちの予言どおり、練習をしながら目に見えて自分の中に活力が蘇ってくるのを感じました。その切っ掛けを作ってくださいました方をご紹介します」

そう言って八木孝子は弦人の方に手を差し伸べた。

弦人は戸惑いながらみんなに頭を下げた。八木孝子は、言葉を続けた。

「三瓶さんは先日の北海道旅行で偶然お話しするところになったのですが、そのとき三瓶さんは、名前も何も知らないわたくしに、あなたは二十才のブラームスの肖像画そっくりだと言われたのです。今日プログラムや看板に使わせてもらった絵がそれです。見知らぬ人に言われたそのことで、わたくしは急に

ブラームスが弾きたくなつたのです。そしてスタッツ
フの皆さん方の大変な努力の結果、今日のようにた
くさんのお客さんにわたくしの演奏を聞いていただ
けました。今日のコンサートはその芽は、北海道行
きのフェリーの中にあつたのでした・・・」

挨拶が終わったとき、スタッツの拍手は彼女だけ
でなく、弦人にも向けられた。そう言われても、特
別なことをしたわけでもないのです、弦人は少し面は

ゆかった。席上何か言うことを求められた弦人は、今日の演奏がブラームスの音楽を、あまりに見事にブラームスらしく表現されているのに驚いたこと、ブラームスの世界に浸れて今もまだ興奮していると
言った。

その場で、彼女がこれからどうするのか話題になった。彼女はアメリカに家があり、既に独立して家庭を持っている子供が二人いる。二人とも音楽家

ではないそうだ。彼女は三年前から事実上引退状態になつており、演奏家として再び活動を開始するにはそれなりの準備と宣伝活動も必要である。スタッツフたちは今日のような質の高い演奏ができるのだから、辞めてしまふのはもつたいたないと口を揃えた。しかし本人は、今日のように一回の演奏会に充分な準備期間を持つてするのなら良いが、コンサート・プレーヤーとして次々と演奏会をこなして行くのに

はもう無理があると、消極的だった。それに自分は母の実家がある大竹がとても気に入っているの、このまま永住しても良いと思っっているとも言った。

帰り際に、弦人がむかしバイオリンを弾いていたと言ったので、こんどブラームスの《バイオリン・ソナタ》をしてみないかと誘われた。弦人は自分の状況を説明するのは、このような華やいだ席ではない方がよいと思い、ただ笑顔で相槌を打つだけにし

た。

弦人はできることなら彼女と合奏したいと思ったが、それは叶わぬことである。それで、自分と八木孝子とでは違いすぎると言つて光栄だが辞退すると手紙を書いた。それに対して八木孝子は、弦人が趣味でバイオリンを弾いていたと思つたようで、

「わたくしが、一緒にバイオリン・ソナタをしませんかとお誘いしたのは、プロとしてではなくお互い

に音楽、とりわけブラームスの音楽を愛するものとして楽しみませんかという意味ですから、何の心配もいりません。わたくしとしては是非お付き合いいただきたいのです」

と返事が来た。そしてこうもあつた。

「演奏家として、ブラームスだけではありませんが、独奏曲と協奏曲はする機会がたくさんありました。が、なぜかピアノの入った室内楽をする機会がなくて、

ブラームスのそういう曲は大好きなのですが、弾いたことがないので。今後は気のおけない仲間を探してそう言った室内楽を気楽に楽しみたいのです」

いくらそう言つて誘われても、今の弦人はそれに応えられない。だがコンサートで聞いたような心にしみる演奏をする人からそんなことを言われるとは、これもひとつのめぐり合わせである。心の中に、何

とかしてジストニアから脱出できないかと言う強い願いが疼いてくるのを感じた。

それにしてもこれほどの音楽家を相手に、先のピアノ・トリオのコンサートで手渡したメモは、何とも恥ずかしい限りだった。それでも怒りもせずいきちんと返事をくれたことを感謝しなければならぬと弦人は思うのだった。

このとき弦人の中では、八木孝子は高嶺の花のよ

うに思えていた。身近な女友達だと思ったのは、一時の思い過ぎしだったのである。

弦人は、今度は自分の本当のことを八木孝子に話すときがきたと思った。弦人は長い手紙を書いた。

八木孝子からは直ぐに、これまた長文の返事が来た。『三瓶さんが高名なバイオリニストだったことを知らないで、本当に失礼しました。わたくしがヨーロ

ツパや日本でも演奏していれば、ご高名をお聞きすることもある。残念ながらほとんどアメリカ国内での活動しかしなかつたので、申しわけありませんでした。また夫が亡くなって帰国したころには、すでにあなたは引退された時期になるので、やはりわたくしが知り得ることにはならなかつたのです。

ジストニアと言う厄介な病気については、わたく

しも音楽仲間から聞いて知っておりました。むつかしい病気のようですが、快復して演奏活動を再会した。ピアノストも知っております。

三瓶さんがアメリカのジストニアを専門にしていると、言う教授のところに行かれたとありましたが、私はその教授を存じ上げません。前述の快復したピアノストが治療を受けたのは別のお医者さんです。一度そのお医者さんに見てもらいませんか。まだお

若い三瓶さんが引退してしまうのは本当に惜しいこととです。というより、わたくしの本心は、病を克服したあなたとデュエットがしたいのです。わたくしの願いを叶えていただけませんか』

その手紙のやり取りの後間もなく八木孝子の周辺では大きな変化が起こっていた。彼女から手紙が来た。

『前略。実は、突然アメリカからコンサートのオフアーがあつて、一度は断つたのですがたくさんのジヨセフイーネファンが待つているからどうしても帰つてきて欲しいと強い誘いで結局断りきれず、アメリカに帰ることになりました。それも一週間後と言ふ急な話です。それで、三瓶さんに提案があります。先日お手紙したジストニアの治療の件で、三瓶さんもアメリカに來られませんか。あちらの私の家に滞

在して治療に当たってはどうかと思うのです。わたくしは一足先に出発しますが、三瓶さんは準備が出来次第来てください。もちろんリハビリもあると思うのであなたの楽器もお持ちになつて下さい』

彼女の帰米も、弦人の治療についても急な話である。弦人はジストニアを何とか克服する努力をしたいと思ひ始めていたので、彼女の提案を受け入れることにした。八木孝子にはその旨返事をした。そし

てとうに切れているビザを取り直し、同時に林健三に電話で事情を説明した。もちろんジストニアの治療にかけてみると言うことは、依頼されている原稿の最後には、当初林が言っていたように、ジストニアを克服する結末が書けるかも知れないことを伝えたかったのである。

実はそれだけでなく弦人は渡米の費用を林に無心したのだった。林は快く金を貸してくれると言った。

その電話で林は、弦人と八木孝子の接触について初めて聞いたと言つて、不満を漏らした。そして、八木孝子の出発前に是非、自分と山根鉄二とを彼女に紹介して欲しいと頼まれた。弦人は、彼女はおそらく大変忙しい時期だから保証はできないが頼んでみると返事した。

弦人は直ぐに八木孝子に電話した。彼女に電話するのは初めてだった。電話には彼女の母親が出た。

電話からはピアノの音が聞こえている。間もなくピアノの音が消えて、八木孝子が出た。用件を伝えると、明日の午後なら会えるが、できれば大竹の自宅に来て欲しいということだった。弦人は了承して、午後二時ころに訪ねる約束をした。

林と山根もスケジュールをそれに合わせると言うことで話はまとまった。三人は一旦弦人のところに集まってから、弦人の車で彼女の家に向かった。八

木孝子の自宅に行くのは初めてだが、住所を頼りに彼女の家は直ぐに見つかった。

八木孝子の実家は、門構えの立派な家で、門扉は開いていたのでその中に見えていた車だまりまで入っていった。玄関には彼女の母親が出てきて、三人を客間に案内した。奥からピアノの音が聞こえてくる。先日周東町で彼女が、その中のアンダンテをアンコールとして弾いたブラームスの《ピアノ・ソナ

夕第三番》である。アメリカのコンサートで弾く予定だと思った。弦人たち三人はみな、本当に忙しいときに邪魔をしたものだと思つて恐縮しながら彼女を待った。

まもなくピアノの音が止んで八木孝子が笑顔で現れた。弦人は林と山根を紹介した。そして、

「ジョセフィーネ・タカコ・ブラームスさんです」と八木孝子のことを紹介した。林と山根は驚いてい

たが、事情を説明すると納得した。林は自分が翻訳したブラームス伝を彼女に献呈した。山根はジストニアについて話し、弦人の快復の可能性はどれくらいあるのか訊ねた。八木孝子は、

「それはわたくしが知っているピアニストが治癒して演奏活動を再開したことを知っているだけで、三瓶さんについては治療を始めてみないとわたくしには何も言えませんが、わたくしとしては必ずバイオ

リンが弾けるようになることを願っています」
と言うのだった。そして、

「三瓶さんとわたくしとは、一旦引退したと言う点では似ていると思うのです。それが再びプロとして通用するレベルにまで戻ると言うのは、技術的にも精神的にも大変だと思えます。でもこんなに身近に、自分のことをブラームスの分身だと信じているピアニストとバイオリニストがいるのですから、本当に

演奏を辞めてしまふ前に一度はデュエットしてみた
いと思うのは、理解していただけるでしょ。だから
今度の渡米は、わたくしの演奏家としての復帰より
もむしろ、三瓶さんのジストニアの治療が大事なテ
ーマなのです」
とまで言うのだった。

弦人は八木孝子の忙しさの邪魔をしないため、渡
米に関して必要な打ち合わせをすませて早々に引き

上げようと焦っていたが、帰り際に一つだけ聞いておきたいことを確かめた。

「フェリーで、髭のないブラームスの肖像のコピーが見たいとおっしゃったとき、八木さんはそんなものは当然ご存知だったのじゃないですか」
八木孝子は、いたずらっぽく笑って、

「ええ」

とだけ答えた。

八木邸からの帰り、林と山根は弦人の家に上がりこんで夕方遅くまで話し込み、三人で近所のお好み焼屋で夕食をした。

林と山根は、あのタカコ・ブラームスと弦人は良い感じじゃないかと冷やかした。

弦人が林に借りるよう頼んだ渡米費用は、山根が弦人に渡してくれた。原稿料の前渡しと言うことだった。それと、山根は今回の原稿は弦人の半生記の

ような形にして、林のブラームス伝と結びつけるアイデアは無かったことにしようとは提案した。林もその方が面白いだろうと同意した。

〔九〕 アメリカ滞在

弦人のアメリカ滞在は予想外に長いものになった。

八木孝子は月に二、三度のコンサートを行い、弦人は彼女が勧めたジストニアの専門医のところに通った。治療と言うより医者考えたジストニアのためのリハビリのメニューを根気良くこなすことが主だった。それは実に根気の要るトレーニングだった。楽器を持って初心者のような練習にも多くの時間が費やされた。医者が言うには、いまは弓を持つ右手だけに症状が現れているが、場合によっては左手に

も発症して、指が動かなくなることもありうるから、そのことも想定して徹底的なリハビリが必要なのだそうだ。腕や指の肉体的なリハビリだけでなく、精神的なトレーニングも合わせて行つた。この病の原因の七十パーセントは心理的なものだからなのだそうだ。そうは言つても単なるあがり性によつて手が震えるのではないため、リラックスしたただけでは震えは止らない。初めのうちはコンサートの最中に静

かな長い音を弾くときに症状が出るような気がしたので、緊張と関係があると考えてどんな場面でもリラックスするように心がけた。それで多少改善するように入ったこともあったが、そのうち自分ひとりで自室で練習するときにも弦人の右手は震えるようになり始めた。医者によると、バイオリン演奏に必要な運動を指令する神経回路の複雑な絡みによって起きるこの症状は、縛れた糸を解くように注意深く

状態を観察しながらメニューを考える必要があるのだった。弦人は週に三回医者のところに通った。

山根が先払いしてくれた原稿料は瞬く間に治療代に消えていった。手持ちが無くなつてからは、八木孝子が肩代わりしてくれた。もちろん弦人は、そんな甘えたことはできないと言つたが、治療を続ける弦人にはまた林に無心する以外思いつく方法は無か

った。彼女はそれなら結婚しようと言った。妻が夫の病の面倒を見るのは当たり前だと言うのだ。弦人は快復して演奏できるようになった自分なら、喜んで彼女と結婚したいと思つたが、今の状態のままでは嫌だつた。それでも彼女は、バイオリンを弾こうが弾くまいが弦人に変わりないのだから、今すぐ結婚しようと言ふのだった。

孝子は、弦人に治療だけは絶対に続けて欲しいと

言い、結局弦人は孝子の好意に甘えることになった。

彼女のコンサート回数は増えていた。それだけオファアがあると言うのも事実だったが、弦人の治療費のこともコンサートを増やす理由になつていくような気がする。彼女はコンサートのために懸命に練習していた。心苦しかつたが、こうなつたら弦人はジストニアを治すしかないと考えた。

八木孝子　つまりジョセフィーネ・タカコ・ブラー

ムスとしてのコンサートは、静かな人気を呼んでいて、そうなるレパートリーも自分が気に入ったブラームスを中心とした曲だけを演奏しているわけには行かなくなってきた。オーケストラからもオファアがあり、モーツァルト、ベートーヴェンそしてブラームスのコンチェルトを求められた。それらのために八木孝子がしなければならぬ準備は大変なもので、一旦引退をしたピアニストにとっては大

きな負担となつてゐることは傍目にもよくわかるの
だつた。八木孝子は実に忍耐強い努力家だつた。コ
ンサート・プレーヤーの大変さを弦人は経験者とし
て理解しているつもりであるが、一切手を抜かない
彼女の取り組みには敬服あるのみだつた。

その間、弦人の右腕は徐々にではあるが快復に向
かつていた。リハビリとしてだけでないバイオリン
の練習も再開した。六年にもなるブランクは小さく

なかつたが、演奏できる喜びは大きく、ブランクを
取り戻す努力は苦にならなかつた。そんなとき、コ
ンサートやその準備、さらにはコンサートのための
移動と疲れきっているはずの八木孝子は、弦人の練
習を見ると、ピアノの前に座って弦人のバイオリン
に合わせてくれたりするのだった。弦人はいいから
休みなさいと言つても、

「あなたと合わせていると疲れた心が生き返る」

と言つて付き合つてくれるのだつた。

一年と半年が過ぎたころ少しだが光明が見えてきた。ある夜、不完全ながら何とか弾ける状態になつた弦人と八木孝子は、ブラームスの《バイオリン・ソナタ第一番》を初めて合奏した。ジストニアが完治したわけではないし、リハビリでバイオリンを持つことはあつても曲の演奏からは離れていたために演奏の勘も戻っていない。途中で止りながらの演奏

だったが、弦人は弾きながら胸がいつぱいになった。弾き終わったとき、八木孝子と弦人は涙を流しながら抱き合った。演奏をしてこんなに感動したことは初めてである。それは、あのザンデルの指揮でブラームスの《交響曲第一番》を弾いた記念すべき演奏会以上のものがあつた。

この夜が弦人のバイオリニストとしての再出発の記念すべき日であつた。そしてこの日から弦人と孝

子は寢室を共にすることになった。

〔十〕 帰国

八木孝子はアメリカでコンサート活動を長く続ける気は無く、弦人の状態に改善が見られたことから、三年目以降のコンサートのオファーを受けないこと

に決めた。つまり渡米後二年でアメリカでのコンサート活動を切り上げて、日本に帰ることにしたのだ。孝子が話していた通り、弦人のジストニアの治療が渡米の目的であることが嘘でなかったのである。

二年目の終わりに、契約していた全てのコンサートが終わった。孝子と弦人は小さな家族の集まりを持った。孝子の二組の息子夫婦、それにアメリカでのコンサートを一手に引き受け、取り仕切ってくれ

たマネージャーが集まった。二人の息子は、日系三世になるわけだが不十分ながら何とか日本語が話せた。だがその妻たちはほとんどわからず、マネージャーはまったく日本語は通じない。それで孝子は英語でこれからの自分たち、つまり自分と弦人のこれからの計画について話した。もちろん弦人も英語で喋った。息子夫婦は孝子たちの計画を快く了承した。いずれ孝子の孫が出来るだろうが、そのときには、

孫を連れて日本に会いに行くのが楽しみだと言つて孝子を喜ばせた。

日本への帰国が近づいたとき、ジヨセフィーネ・タカコ・ブラームスのファンの有志が送別会を開いた。その会にはマネージャーも参加した。そこで八木孝子と弦人はブラームスの《バイオリン・ソナタの第一番》の一つの楽章を演奏した。弦人にとっては引退後初めて人前での演奏だった。これを聞いた

マネージャーは、これなら充分ブラームス・デュオとして売り出せるのにと残念がるのだった。

帰国に際して、孝子はアメリカの住まいを処分した。もうアメリカでの活動はしないという決意の表れだった。

帰国した八木孝子と三瓶弦人は正式に結婚をして、音楽を楽しみながら余生を送ることを考えていた。

それを孝子は『ささやかな音楽活動』と呼んだ。それだけでなく年老いた自分の母親の側で暮らしたいとの思いも強かったのだ。

〔十一〕 大竹での生活

広島に戻った弦人は、アメリカ滞在中に書いてき

た原稿に、ジストニアの苦しみから脱出した章を付け加えて山根に渡した。それからしばらくの間は山根と弦人の間で原稿についての校正や修正のやり取りが続いたが、何とか出版にこぎつけた。表題は『ドレスデンそして日本』と言うことになった。表紙カバーにはドレスデンのオーケストラでコンサートマスターとして演奏している弦人の写真が使われた。

まもなく出版されたが、一部の新聞の書評欄に小

さく取り上げられたものの、爆発的に売れるような種類の本ではなく、印税で生活して行けると言うものでも無かった。演奏を辞めた八木孝子も、ジストニアが治ったというだけの弦人も無収入だった。それでも何人かの知り合いからは出版の祝いの言葉が寄せられた。もつともそれらの多くは八木孝子の勧めで本を贈呈した人たちからのもので、書店で本を買って読んだわけではなかった。しかし読んだ人た

ちからの評は概して好評だった。

八木孝子と弦人は正式に籍を入れた。八木孝子は三瓶孝子となった。弦人は五日市のマンションを処分して、大竹の孝子の実家に住むことにした。孝子の母親と三人の静かな暮らしが始まった。

孝子と弦人の当面の課題は、これからの老後を経済的にどうやって生きていくかだった。孝子が望ん

でいる『ささやかな音楽活動』で食べていけるかも問題になった。孝子は、そのような演奏活動はぜひやっけて行きたいが、それは無料か有料でも演奏会場費が出るくらいにしたいと言う。生活は自分の貯金と親が残してくれたものでやっけていこうと主張した。それは、弦人としては、居候として婿に入り込んだみたいで余り気持ちが良い形ではなかった。

「じゃ、本を書いたら。弦人の文章は読みやすいし

面白いから」

と孝子は言う。

「僕が書くような分野の本は、ベストセラーになつたりしないからね」

と弦人が渋っている、

「音楽じゃなくてもいいじゃない。推理小説なんか当たると儲かると思いますよ。とにかく本はいくら高く売っても良いけど、『ささやかなコンサート』で

は儲けたくないの」

新生活の祝い半分冷やかし半分でやって来た林と山根に、弦人は相談してみた。

「孝子が、生活費を稼ぎたいのだったら、推理小説でも書けばいいって言うんだけどどう思う」

「わが社はオールラウンドだから、売れそうなものなら何でも引き受けますよ。ただし小説系だと担当は私じゃないですけどね。小説は評論などと違って

売れて何ぼうの世界だから、チエツクは相当厳しいですけどね。三瓶さんなら文章面白いから作家デビューできるかも知れませんね」

「そうでしょ。わたくしが言った通りね。出版者の方が言うのだから間違いないね」

「でも奥さん、演奏活動もお二人でされるんですよ」
「それは弦人には両立させてもらわないと」

「それより演奏するときには、三瓶孝子じゃなくて、

ジョセフィーネ・タカコ・ブラームスがいいね」
林が割って入って、本の話は終わってしまった。

「そりやその方が良いですよね」

山根も林に同調した。

「ところで演奏会の計画は進んでいるの？」

林の質問に孝子が答えた。

「具体的にはまだですが、一回目は周東町でしたい
と思っています。でもプログラムも何もまだまった

く考えておりません。良いアイデアがありますか？」

「僕たちとしては、奥さんのピアノはもちろんです
が、復活した二瓶の演奏が凄く楽しみなんですよね」

「もちろんそれが第一回目の目玉になると思います
よ」

と孝子。

「目玉だなんて止めて下さい。僕は隅のほうで少し
だけ弾かせてもらおうので充分ですよ」

「天下のドレスデンのコンサートマスターが何言つてるのですか」と山根。

しかし、身体を壊して引退した演奏家にとって、かつての栄光をそのまま維持していると思われるのは辛いことである。弦人は、その場で盛り上がっている話のようなものでなく、今の自分の身の丈に合ったコンサートを望んでいる。そのことは孝子とも

話し合っているのです、彼女はエスカレートしたりしないと思う。いずれにしても演奏会のことに関して、ついこの間まで現役として弾いていた彼女に任せることにしている。そして、著述については、とりあえず何か書いてみようかと弦人は考えた。

弦人は『ドレスデン、バイオリン盗難事件』と言うタイトルの推理小説を書き始めた。並行してバイ

オリンの練習もした。

孝子は、ブラームス・デュオの名で、出演するこ
とにして、『ささやかなコンサート』と名づけたコン
サートを企画した。

第一回目はオール・ブラームス・プロで、《バイオ
リン・ソナタ第一番》とピアノ独奏曲何曲かである。
入場料は千円として、何とか経費だけが賄えれば良
しと考えた。人手としては、例の北海道に行った二

人の友達が買って出てくれた。

彼女たちの努力で、約二百人の聴衆を集めて演奏会は開かれた。おおむね好評で、またの開催を望む声も聞かれた。これは、弦人の復帰第一回の演奏会で、弦人としては一曲弾いただけだが、非常に大きな意味があった。同時に、弦人のジストニアを治して共演したいと願ってきた孝子にとつてもその意味

で記念すべき演奏会だった。そのような内部事情を知らないものにとつては、一度引退した演奏家が、地元で隠居して残り火で細々とコンサートを続けていくように見えただろう。しかしブラームス・デュオの演奏は、じつくりと耳を傾ける者にとつては、商業主義の華やかな宣伝に彩られたコンサートとは比べ物にならないほど内容の濃いものだったのだ。それは孝子の並々ならぬブラームスに対する造詣と、

それを実現するための努力によつて支えられるものだった。

そして弦人のジストニアは、ほとんど演奏に影響しないまでに回復していることが証明されたのだった。このコンサートで、孝子はブラームスの作品一七の一の《インテルメッツォ》をアンコールとして弾いた。この曲は弦人がもつとも好きな曲として、治療中にしばしば孝子に弾いてもらっていた曲であ

る。孝子は弦人に捧げるつもりでこの曲を弾いたのだった。

孝子と弦人はスタッフを交えて、これからどのよ
うなコンサートを、どれくらいのペースでやってい
くのか慎重に検討した。その基本には、本当に良い
演奏だけを提供することとし、そのための努力は絶
対に惜しまない。もし、その努力をするだけの気力
と体力と集中力が無くなったら、コンサートは辞め

ると決めた。

弦人の『ドレスデン、バイオリン盗難事件』は、主人公のバイオリニストが本番を控えて高価な名器を調整に出す。信賴している工房のところに出したのだが、偽物とすり替えられてしまう。楽器製作でも評価の高い職人を抱えた工房だが、名人は贋作の製作も名人だった。歴史上イギリスで本当にあつた

と言う話をヒントにした推理小説である。

バイオリニストはすり替えられたことに気が付かず、舞台上で演奏する。しかも気付かないままその偽バイオリンを何年も使い続ける。しかしある事件がきっかけで、知らずに使い続けていたバイオリンが、偽者であることを知る。バイオリニストはいつ何処ですり替えられたのかを、謎解きしていく。謎解きの過程が物語の山場なのだが、その部分で緊張感の

ある面白さが出せずに、弦人は暗礁に乗り上げていた。

一方『ささやかなコンサート』の計画はとんとん拍子に進捗して、二回目はチェリストを加えて、ピアノ・トリオとして、同じ周東町で行うことが決まった。名前はそのままブラームス・トリオとした。チェリストは、広島で活動している、もと東京のオ

ーケストラで首席奏者を務めていた人だ。林健三の息子がレッスンを受けていた関係で知り合うことになった春野聡である。年令は孝子たちより一回り以上若かった。

トリオをする三人は大竹の弦人たちの家で何度もリハーサルをした。プログラムは、トリオとしてはブラームスの《ピアノ・トリオ第一番》一曲だけで、あとはピアノ伴奏のバイオリン曲とチェロ曲それに

ピアノノ独奏曲で構成した。今度はオール・ブラームスにはしなかつた。

一回目が終わってから僅か三月後のコンサートだったので、客の集まりが心配されたが百八十人くらいは集まってくれた。このときも孝子はブラームスの晩年の《インテルメッツォ》をアンコールで弾いた。ピアノ・トリオの評判が良かったし、演奏した三人も非常に相性が良いと思つたので、次回もピアノ

ノ・トリオで行こうと言うことになった。

弦人は練習に疲れたら原稿を書くと言う日課を定着させつつあった。

〔十二〕 暗雲

『ささやかなコンサート』が二回目を終えたとき、

それまでずっと会場となつたホールのホームページを見た東京のある大手音楽雑誌の記者が取材にやつて来た。彼は三瓶弦人がもとドレスデンのオーケストラのコンサートマスターだつたことを、先輩から聞いて関心を持ったのである。調べていくとブラームス・デュオのピアニストは、元の名前をジョセフイーネ・タカコ・ブラームスと言ひ、彼女の父親は大作曲家ブラームスの家系の末裔の可能性があると

知って、なお興味をそそられたのだった。

孝子たちは取材に対して、『ささやかなコンサート』の趣旨をありのままに話した。その真摯な取り組みについても、練習の現場を取材させることまでして、いかに音楽的な内容を深く求めているかをわかってもらうように務めた。

また弦人のジストニアについても詳しく話した。同じように悩んでいる音楽家の参考になればとの気

持ちもあつた。

孝子は、

「お宅のような全国誌に出ると、話が大げさになつて、『ささやかなコンサート』の趣旨が、歪められて『ささやか』でなくなつてしまふことを心配していただきます。あくまでも『ささやかなコンサート』として、商業ベースにならないで、音楽の内容だけを第一に考えていきたいのです。その点をくれぐれもよろし

くお願いします」
と念を押したのだった。

それにもかかわらず、その記事を掲載した雑誌が発売されると、デュオ・ブラームスあるいはトリオ・ブラームスは話題になり、第三回の『ささやかなコンサート』は何時あるのかとか、周東町以外でも開いて欲しいなどと言う問合せや要望が、孝子が開いているホームページに殺到した。また、これまでコ

ンサートのことをまったく知らなかったと言う広島
の音楽関係者も、急に連絡をしてきた。

このような現象はすでに『ささやかなコンサート』
の趣旨に反している。孝子と弦人は対応を考えた。
『ささやかなコンサート』が『ささやかでないコン
サート』になることを心配する孝子と弦人に対して、
孝子の母親は、

「いいじゃないの、大いにやりなさいよ」

とおおらかに言うのだった。この母親と似たような立場を取ったのは、林と山根だった。彼らは過去二回の『ささやかなコンサート』を聞きに来てくれた。そしていつも、こんな素晴らしい演奏会は他に無い。もっと広くたくさんの方が聞けるようにすべきだと主張していたのである。

「いつそのこと全国ツアーをやったら」と山根がいかにも簡単そうに言う。弦人は音楽的な

準備以外の事務的な仕事の大変さを、ドレスデンを辞めて帰国してからの演奏活動で嫌と言うほど経験している。

「口で言うのは簡単だけど、実際に運営するとなると大変だよ」

実は、このような前向きな話が交わされている一方で、弦人は密かな不安を抱えていた。ジストニア

の再発ではないかと思われる兆候が、他人にわからない程度だが、今度は左手に現れたのである。それは前回の時と同じように症状が現れたり現れなかつたりとまだら状態である。しかし、自覚してから一月もするとそれは兆候と言うよりもはっきりした症状となつてきた。

弦人は孝子に打ち明けた。孝子は弦人以上にシヨツクだつたようだが、

「一度克服したのだから、今度も治せるわよ」と言う。しかし二か月後には左手の指は演奏中突然動かなくなると言う、事実上演奏不可能な状態になつてしまつた。

弦人は、右手と左手の違いはあるが今回もジストニアに違いないと考えて、前回の治療で教えられた方法を応用して独力でリハビリを試みた。だが効果は現れず、症状は悪くなる一方だ。

トリオの演奏が不可能になったので、全国ツアーの話は具体化する前に立ち消えになったが、周東での『ささやかなコンサート』の要望は多く寄せられ続けたので、ピアノの孝子とチェロの春野聡による第三回目を行うことになった。

チェロ・ソナタなど本格的なチェロとピアノのデュオは始めてだったので、二人は連日のように、プログラムに選んだブラームスとベートーヴェンの

《チェロ・ソナタ》の練習を始めた。

弦人は漏れてくるその音を聞きながら、推理小説を完成させようと苦心していた。二人の練習は長時間に及び、夕食を挟んで深夜にまで及ぶこともあった。孝子が徹底した音楽性の追及の手を緩めず、一切の妥協を認めない姿勢が、弦人と練習するときと同じように行われていることが想像できた。弦人のときは、少なくともブラームスを弾くときは孝子も

弦人も、それぞれの中に持っている作曲家への共感があつたために、妥協を許さない厳しい練習と言つても、お互いが認め合つたことをどのよう表現するかを一緒に探求すると言ふ、ある意味で楽しい作業だつた。

弦人は孝子と春野の練習の現場に入るのを遠慮していたので、その場のやり取りについてはわからなかつたが、おそらく春野のブラームス観が孝子のそ

れと、弦人と孝子の場合ほど一致していかないのではないかと思つていた。そのためだろうか、中休みを兼ねて夕食を共にしているときに、孝子と春野は気のせいか不機嫌そうに見えるたし、練習についてはほとんど話をしなかつた。食事がすむと、二人は重い腰を上げるように練習室に向かうのだつた。そのようなどきの食事の後片付けは弦人が引き受けた。

練習室からは直ぐにブラームスの《チェロ・ソナ

夕第一番が聞こえてきた。しかししばらく進むと音は止り、長い時間何も聞こえてこなくなる。意見がまとまらないのだろう。表現の方法で意見が行き違うのなら解決しやすいのだが、解釈が食い違っていると出口はなかなか見つからないものである。

この日も十時過ぎに二人は疲れ切ったように練習室から出てきた。孝子がこれから車で広島市内まで帰っていく春野のためにコーヒーを入れた。弦人も

お相伴して三人はテーブルで向かい合ったが、孝子と春野は口を利かない。その雰囲気、弦人も練習の様子を聞きだすことができなかつた。春野は、喧嘩別れでもするようになりに小声で挨拶して帰っていった。コーヒーカップを洗う孝子は、春野から開放されて気が楽になったのか、それまでの様子が嘘のように、上機嫌になった。ブラームスのソナタの一節を口ずさんだりしている。弦人は、

「練習うまくいってないの？」

と聞いてみた。孝子は、

「いや、別にそんなことないわよ。でもチェロとピアノの合奏って思ったより難しいわ。相手がバイオリンだとバランスが取りやすいのに、チェロは大きな音がするようで、意外にピアノの音に埋もれやすいのね。あの人、いろんなところで、ピアノはもつと静かに弾けないのかって言うのね。私はトリオの

ときと同じように、チェロにマツチした音色を心にかけて弾いているつもりなのに」

「トリオのときは、林や山根もあんなにピアノが弦と溶け合ったトリオは聞いたことがないくらいだと
言ってくれたよね」

「やっぱりトリオはバイオリンが主役のことが多い
て、チェロが表に出る場面はそう多くは無いのよ。
だからそのような場面では明確にチェロを浮き立た

せるように書かれているのよね。逆にそうでもないところではチェロは何を弾いているのかわからないくらいピアノの音に飲まれていることが結構あると思うわ。それに比べて、チェロ・ソナタは基本的にチェロが主役でないとだめですものね」

弦人は孝子と春野が苦労している内容がわかった。必ずしもブラームスの解釈で意見が合わないからではないらしい。そう言えば、ブラームスのピアノ・

トリオの練習で、春野はあまり解釈については意見を言わなかった。弦人たちの解釈と違和感がなかったのかも知れない。苦勞しているように見えた割に、孝子は次の春野との練習の日までずっと上機嫌だった。

弦人はあまり筆が進まないまま、パソコンの前に座り続けていた。パソコンを打つときに左手の指はまったく正常に動く。しかし、ためしにバイオリン

を持つてみるとやはりまったく駄目だった。

弦人は、かつて孝子の願いもあつて治療に取り組み一度は復帰を果たした。しかし人前で演奏できた期間は一年もなかった。今度は孝子も諦めたのか、再び治療に取り組むことを口にしない。おそらく弦人に治療の苦勞をさせることを躊躇しているのだろう。弦人も内心、バイオリンを辞めてもいいと思うようになり始めていた。

春野は昼過ぎにやって来て、夕方遅くまで休憩も無く二人は音楽室にこもりつきりで練習していた。いつものように音が聞こえてくることもあり、静かなところを練習しているのか、議論しているのか何も聞こえてこないこともあった。

この日、珍しく孝子の母親が、パソコンに向かっている弦人の部屋にやって来た。母親は、弦人が推理小説を書いていることを知っている。夕食のとき

に小説の筋を話題にしたり、面白いトリックが出来ないとと言うと、孝子と母親があれこれ面白がつてアイデアを出したりすることもある。

「面白いの書けてるの」

「書いてはいるけど、なかなか他人が読んで面白いと思うようにはならないです」

「それ、メ切あるの」

「特には無いけど、そろそろ仕上げないと出版社に

忘れられてしまいそうですね」

「ところで、孝子たちの練習大変そうですね。この前だつて、ご飯一緒に食べたでしょ。二人とも何も喋らないで喧嘩でもしているみたいだったでしょ。弦人さん、練習見に行つてみたら？」

音楽に関しては一切口を出したことがない母親だったから、そんなことを言うのは珍しい。

「いや、真剣に練習しているときに他人が居たら嫌

なものですよ」

「他人じゃないでしょ。それにあなただって立派な演奏家なんだし」

「それだからなおさらなんですよ。演奏家同士はもつと気になるものですよ」

「そんなものかね」

弦人が母親とそんな話をしていると、孝子が入ってきた。

「お母さん、書き物の邪魔にならないようにね。それより夕食にしません？」

「練習すんだのかい。春野さんは？」

「もう帰られましたよ。簡単なものだけど用意できたから」

「ええ？もう夕食の準備までできたの？今日はあつさり練習をすませたのね」

「今日はね。でもまだまだね。本番までがんばらな

いと」

本番は二週間後に迫っていた。

「それまでにあと四回くらい合わせようと言ってるの。やっぱり誰でもいいからバイオリンがいてくれないと駄目ね」

そう言ってから、孝子は弦人に悪いことを言ったと思つたのか、

「ごめんなさい。バイオリンは弦人以外考えられな

いから、無いものねだりね」と言い繕った。

次の練習のときだった。孝子の母親がまた弦人の部屋にやって来た。何か弦人に言いたいことがあるようだ。実は前回も、何か言いたいことがあつたらしいことに弦人は気が付いた。「練習を見に行ったらどうか」

と言ったことだ。

この日はいきなり、

「今日は練習を見に行きなさい」

と命令口調である。

「わたくし、庭を散歩していて見てしまったの。あの二人が抱き合っていたの。早くいって孝子を止めて欲しいの。あの子、そう言うことで走り始めると止らなくなるのよ。昔からそうなの。結婚前も、亡

くなつた前の夫がいるときもいろいろあつたの。いい加減年になつたので、あなたが最後だと思つていたけど、病気みたいなもので治らないのね。弦人さんみたいの良い方と一緒になつたと言うのに。本当に申しわけないわ」

弦人は驚いた。あの品の良い孝子がまさか。

「そんなこと……なんかの見間違いじゃないですか」

「いや、見間違いじゃありません。孝子が悪いのです。五十過ぎた女に手を出す若い男なんていけませんよ。しかもこの家の中で、弦人さんやわたしがいるのに」

母親は怒りに震えている。でもそうと知ってしまった。弦人はなおさら練習室に行けなくなつた。

この日の練習は夕方終わり、春野は明るいうちに

帰っていった。三人の夕食は、沈黙の晩餐となった。あらかた食事がすんだとき母親が切り出した。

「孝子、弦人さんにも言ったのだけど、春野さんと
どういうことになっているの」

「どうということって？」

「わたしはこの目で見たのですからね。ちやんと説明してくださいよ」

「見たって、何を見たって言うの？」

「春野さんと抱き合ってたでしょ。わたしは絶対に許しませんよ」

「何のことだかわかりません。弦人のいる前でそんないい加減なこと言わないでくださいよ。いつ何を見たのかちゃんと説明してくださいよ」

「わたしが庭を歩いてたら、練習室の中であなたと春野さんが抱き合っているのを見たって言うてるの」

「わたしたちそんなことしてませんよ。だって、するわけ無いでしょ」

「ちゃんと見ました。正直におつしやいよ」

「まあ、お母さんもそれくらいにして。僕たち夫婦でちゃんと話し合いますから」

「ちゃんと話し合うって、わたしはあなたと話し合わなければならぬことなんて何も無いわよ」

孝子は顔を真っ赤にして、母親の見たということを

否認している。弦人はどうなだめたらいいのか困惑した。

最近、孝子と弦人は意見の食い違いで夫婦喧嘩になることがよくある。しかし今回のような、母親の介入で露骨な内容になったことは無かった。

その晩、弦人が待つ寝室に孝子は来なかった。

翌朝弦人が起きていくと、孝子が一夜を過ごした

と思つていた居間に、孝子はいなかつた。台所にも洗面所にもいない。母親も起きてきて一緒に探したが、孝子は見つからなかつた。そして、練習室のピアノの譜面立てに一枚の便箋があつた。それには、『勝手ですが、しばらく家を出ます。私は大丈夫ですから探さないでください。孝子』とだけ書いてある。

「あの子は、春野のところに行つたのよ。だいたい

コンサートはどうするつもりなのかね」

弦人は、母親の言葉を聞きながら、トルストイの小説『クロイツェル・ソナタ』の親和力のことを思い出した。

しかしいまは、孝子と春野のコンサートの十日後に迫っている。そのために二人は懸命に練習していたはずである。

孝子がいなくなつて三日たつても何の連絡も無か

った。

弦人と母親はコンサートを中止せざるを得ないと考え、世話人に連絡した。理由は孝子、春野のどちらとも言わずにただ演奏者の急病と言うことにした。孝子の親友である世話人の一人は病状を訊き、見舞いに来ると言ったが弦人たちは曖昧な言い方でそれを辞退した。その言動から昔の噂を思い出した親友は、それ以上聞きただすことをやめた。

弦人はその噂を知らなかつたが、母親の話によるとアメリカで演奏活動をしているときのことであつた。孝子は亡くなつた夫と結婚していたが、コンサートを目前にしてある音楽記者と姿を消したのである。コンサート当日演奏者が会場に来ないと言う、前代未聞の事態になつたのである。そのコンサートは、孝子が急病で倒れたと言うことでキャンセルされ、来場者にはその場でチケット代が払い戻しされ

た。

孝子には根強いファンがいて、このキャンセル騒ぎにもかかわらず、その後のコンサートに聴衆は集まったのだった。

母親は、孝子はそのときコンサートの重圧に押しつぶされそうになっていたと言った。コンサートをキャンセルした直接の理由はその重圧だったが、孝子には結婚前からある男に出会おうと、油に火を注ぐ

ように燃え上がり前後見境がなくなる性癖があつたと弦人に語つた。そのときはコンサートから逃げ出したいと言う気持ちが高まつているときに、孝子がすぎる男が現れたと言うのである。弦人が初めて聞く話であつた。それでも実業家であつた夫は孝子を暖かく許し、孝子も結局はその夫の懐に戻つたのだつた。そのようなことは、コンサートがキャンセルされた事件のときだけでなく他にもあつたのださう

だ。

しかし実業家の夫が亡くなつてからの孝子の落ち込みようは大きかつた。孝子にとって夫は全てを包み込むような愛情を注ぐまるで父親か母親のような存在だつたのかもしいと、孝子の母親は弦人に話すのだった。

「実際の親はもちろん私なんですけど、私は孝子にとってには厳しい母親で、もしかしたら孝子のそうい

う性格は、わたしの中にもあつてあの子はそれを受け継いだのかもしれないわね」

母親は、孝子の過去だけでなく、自分の過去も思い出すように窓の外を眺めた。そして、

「夫が亡くなつた後、私の元に帰っていた孝子は友達に誘われて北海道旅行に行き、あなたに出会つて元氣を取り戻したのです。音楽に復帰したときには、男性に燃え上がるあの子の性格がいい方に働いたと、

私は喜んでいたのですよ」

母親は一度言葉を切つてから、

「弦人さんには本当に申し訳ないと思ひますが、あの子はきつとあなたのところに戻つてきます。母親の勝手なお願いですが、どうか戻つてきたら受け入れてやつて欲しいのです」

沈んだ声で話す母親の言葉を弦人は黙つて聞いていた。弦人は、孝子が演奏解釈のことなどで意見の

合わないチェリストとのコンサートが近づくにしたがって重圧を感じて、ついにそれに耐え切れなくなつて、当のチェリストにすがることで逃避し、現実にも姿を消したのだと、ことの成り行きを理解しようとした。

孝子から何の連絡も無いまま三か月が過ぎ、半年が過ぎた。弦人は母親と二人で孝子のいない広い家

で暮らした。母親は八十才になり、体調を崩すことが多くなっていた。弦人は小説を書きながらそのよ
うな母親の世話もした。小説は何本も書いていたが
いずれも出版には至っていないかった。

母親の健康状態は悪くなる一方で、ついに入院す
ることになる。弦人は何とか孝子と連絡を取りたい
と思い、孝子の書類の中から春野聡の電話番号を見
つけ出して連絡した。コンサートキャンセルのとき

に世話人がいくら電話しても繋がらなかつたという番号であつた。しかしこのときは女性の声が電話口に出た。弦人が事情を話して、三瓶孝子の消息を何か知らないかと訊くと、女性の声は急に険しくなつた。

「そのことならこつちが訊きたいくらいです。主人から連絡がなくなつてから何か月にもなるんですよ。奥さんもいなくなつたのだつたら、失礼ですがお宅

の奥さんが関わっているのじゃないですか」

「私どももどういふことなのか把握していないので
す。ただいまは家内の母親が入院して、しかも状態
が悪くなっているのです」

弦人は、春野の奥さんも自分と同じ立場であるこ
とを知った。

〔十三〕 礼文島

そのころ孝子と春野聡は北海道の礼文島にいた。

礼文島は春野の父親の出身地で、父方の実家があり、いまも聡の祖母が一人でひっそりと暮らしている。二人は、恋の逃避行の末、文字通り北の果ての祖母の家に押しかけたのであった。

春野聡の父親はこの礼文島で生まれたが、音楽家を目指して親の反対を押し切つて家出するようになり、東京に出た。東京でフリーのチェロ奏者として何とか

糊口を凌いでいた。そのとき結婚して聡が生まれた。両親は聡も父親と同じようにチェリストに育てた。しかしその後離婚、聡は父親が働きながら育てた。父親は聡がチェリストとして仕事を得るまでになつたのを見届けるように、自分は病で亡くなつてしまふ。

聡は結婚して二人の子供をもうけ、広島のおーケストラに就職した。その後おーケストラは退団した

が、フリーとして活動していた。

春野は、礼文の祖母の存在は知っていたが、親の代から行き来がほとんど無かったこともあつて聡が祖母に合うのは初めてだった。

祖母は合つたことも無い孫がいきなり年上の女を連れて現れたことに戸惑つたが、とりあえず二人を受け入れた。生活は孝子のキャツシユカードで続け

られた。春野はチェロを持ってきていたが、その隠れ家にピアノはなかった。孝子は近くの公民館の何年も調律などしたことのないピアノを弾きにときどき出かけて行つた。そんなときたまに春野がチェロを持って現れ、合奏をすることがあつた。二人は公民館にあつた小学生の音楽の教科書にある曲を弾いたりした。

それを聞いた公民館の館長は、町の人たちのため

に小さなコンサートを企画した。演奏する曲は小学校の教材の歌や、童謡などだったが豊かな音楽性と技術を持った二人による演奏は、公民館の小さなホールを超満員にした聴衆を大いに満足させた。

このコンサートの記事が小さいながら写真入で北海道の新聞にでた。そして全国のローカルな話題を紹介するラジオ番組でその記事のことが取り上げられたのである。

たまたまこれを車のラジオで聞いた山根が孝子と春野が礼文島にいることを知ったのである。山根は直ぐにこのことを弦人に知らせたが、弦人と母親は直ぐには行動を起こさなかつた。

母親はそんな生活は長く続くはずは無いから孝子は必ずここに戻つてくると信じていた。

孝子からは何の連絡も無いまま、数か月が過ぎたころ、林は広島島の街で春野らしい人物を見たとき、

に知らせてきた。林によると、そのとき孝子は一緒ではなく春野一人だったと言う。

弦人は母親の具合がよくないので何とか孝子と連絡が取りたかったので、礼文島の公民館と言うところに電話してみた。例のコンサートを実行した公民館長は親切に対応してくれたが、コンサートで演奏した二人はその後礼文島を離れたので、現在の消息はわからないと言う。二人が滞在していた春野の祖

母は今も健在だが、二人の消息は知らないらしい。

弦人は仕方なく春野の妻がいるはずの、広島の春野の家にもう一度電話した。

春野の妻が電話に出た。妻の話では、春野はたしかに一人で帰ってきたが、自分たちは離婚したと言った。孝子と一緒にではないと思うとも言った。妻は春野の連絡先は知らないと言った。そんなはずはないと思つた弦人はしつこく電話番号を聞くと、妻は

しぶしぶ春野の携帯電話の番号を教えてくれた。

弦人がその番号にかけると、聞き覚えのある春野の声が答えた。春野は弦人からの電話に驚いたようだった。が、覚悟を決めたのか落ち着いた声で弦人の話を聞いた。弦人は、孝子の母親の容態が悪いので孝子と連絡が取りたいと言った。

春野は、孝子とは礼文島を出てから別れたと言った。礼文島にいるとき既に孝子の心は春野には無か

ったと言う。孝子は利尻の公民館の壊れかかったピアノでブラームスの晩年の「インテルメッツォ」を、涙を浮かべながら何時までも弾いていたそうだ。春野はそんな孝子を見て弦人を思っていることを悟ったと言った。だが、いま孝子が何処にいるのか知らないと言う。ただキャッシュカードを持っていて、生活には困っていないはずだと言った。何処かのホテルか何かにいるのではないかと言うのだった。そ

して、

「私は、あなたには合わせる顔も無いが、別れるとき孝子さんはあなたのところに戻りたいが、戻れないと言つて泣いていました。きつと何処かから連絡してくると思うから、私が言えるようなことではないけれども、彼女を許してやってください」

妻の駆け落ちの相手から直接このようなことを言われようとは思わなかったが、弦人は彼女の母親が

言つたとおりだと思つた。

〔十四〕 帰還

孝子からは何の連絡も無かつた。母親の容態はますます悪くなりついに孝子の母親は、弦人一人に見守られて息を引き取つた。

葬式などはせず、死亡届と火葬許可だけを取って
弦人はたった一人で孝子の母親を送ったのだった。

それから一週間後、弦人がしょんぼりと庭を眺め
ているところに、虫の知らせでもあつたのか、憔悴
しきつた孝子が帰ってきた。

弦人は何も言わずに孝子を迎え入れた。二人の間に
会話は無く、長い時間母親の骨箱の前に座り続け
た。

翌朝弦人は、孝子が弾くブラームスの作品一一七の一の《インテルメッツォ》で目が覚めた。中間部のあてもなく彷徨うような部分を挟んで両端の主題部分は、澄み切っている。それは孝子が弦人に語りかけているようにも聞こえる。

弦人は聞きながら、孝子の全てを許そうと思った。

〔了〕

*この物語はすべてフィクションであり、登場する人物その他はすべて架空のものです。

編者あとがき

著しくIT技術の発達した今日、かつて発表の機会に恵まれなかった無名アマチュア作家に大きなチャンスが到来しました。昨年末のAmazonのペーパーバック進出はさらに力強い追い風となっています。

故山中與隆は、定年後すぐに退職し、アマチュア

としてチェロを弾いて室内楽を好きなだけ楽しみな
がら第二の人生を過ごしておりましたが、それと同
時に、作家になることを目指して文筆を続けると宣
言し、毎年のように懸賞に応募していたようです。
それは近年まで続けられていたことがパソコンの中
身から分かりました。傍におります妻の私は、とう
に文筆を止めてしまっていると思っておりますの
で、それを知って愕然としました。

ここに、山中與隆が書き残しましたものを順次発表していこうと決心しました。なんらかのきっかけで本作品をお手にとって頂けたご縁を嬉しく思います。今後発表する作品にもご期待下さい。

またブログ ([URL:https://www.duoyamanka.com](https://www.duoyamanka.com))
への投稿の形でも発表していきたいと考えております

すので、あたたかく見守っていただければ幸いです。

二〇二二年四月

山中伶子

※1 山中與隆（やまなかともたか）の名前についで

與隆の「與」の字は「与」の旧漢字です。従って、入力時に「よ」で変換をかけると、下位ではありませんが、表示されません。

著者紹介

山中與隆（やまなかともたか）

一九三九年～二〇二一年

「名古屋生まれ、広島大学卒。小学校の教員暦七年、その後一般のサラリーマンを三〇数年。いまはリタイアして悠々自適の生活を享受中。大学時代に始め

た弦楽器（初めはヴィオラ、その後チェロ）を今も
続けている一方、小説や随筆の執筆にも力を入れた
いと思つています。

書くものとしては文学的なものから推理もの、歴
史もの、恋愛もの、ファンタジー、社会派的なもの
などジャンルを選びませんが、常にベースには何ら
かの形で音楽が絡んだものにしたたいと考えています。
ライフワークとしたい目標は、音楽を前面に出し

たもので読者の方々に小説としての読み応えと、そこに登場する音楽を是非聴きたいと思ってもらえるような、しかも私の著述によつてその物語にも音楽にも感動してもらえらるような作品を完成させたいと思つています。」

著者プロフィール(二〇一〇年五月)より

今後の出版予定作品

今後は、既刊の電子書籍のペーパーバック版を出版の予定です。

既刊作品

|| 電子書籍 ||

『都志見往来日記』 異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

蒸発の衝動

インテルメッツォ

爆発

妻が消えた

既刊の短編

アマールスを聞く男

オセロー

テンペスト

定年の晩

魂の三重奏

ロシアンルーレット

ささゆり

才能移転

ある三文作家が見たもの

けんか

袖ふれあうも

ミスターフエイト

峠を越えて嫁入りした女

花火見物

ある小学校教師の敗北

三坂峠 二話

第一話 《お蓮・勘兵衛 悲恋の墓》

第二話 《緑のトンネルで》

阿弥陀山

ゴーシユの華麗なる転身

ある男の臨終

野の寂しさ

四重奏

親も子も老いて

わしや、ただの山ザルじや

リヨウコからの電話

カルテットの風景

「オセロ」く手紙版

出来る間に、出来るだけ

なぜ？

紀行文

広島百山と吉和冠山登山

ひとり、山を歩く

短編シリーズ String Fiction Series

1 弦楽四重奏団 a

2 弦楽四重奏団 b

3 親和力

- 4 トリオ・ソナタ
- 5 不協和音
- 6 解散
- 7 音楽のある生活
- 8 ビオラを弾く生活
- 9 疑問
- 10 生きがい
- 11 激情

12 カルテット

最終三作品

裸の王様は何処へ行く

むかし俺がクマだったころ

ある兵士の物語

Ⅱ既刊のペーパーバックⅡ

『都志見往来日記』異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

短編集テンペスト他

短編集2―ある三文作家がみたもの他

短篇集3―ミスターフェイトほか

インテルメッツオ

2022年9月20日初版発行

著者:山中與隆

編集:山中伶子

表紙素材元:

www.photo-ac.com

・タイトル:小さな川沿いに咲く
エゾカンゾウの花

作者:S.Yasunaga Photoさん

写真のID:22097871

・タイトル:チェロ

作者:r*****

***mさん

写真のID:3669919

www.ac-illust.com

・タイトル:ピアニスト

作者:acworksさん

イラストのID:1393837

©Tomotaka Yamanaka 2022

<https://www.duoyamanka.com>
